特別
イ 4
3163
1(4)

後撰和歌集巻第十一

恋三

女のもとにつかはしける　　三条右大臣

なにしおはゞあふ坂山のさねかつら
人にしられでくるよしもがな

藤原元方

ひとゝいとゝこゝろもいつはりの
ところをも人にしらすとさらん
色に[illegible]人しれ

きみとひしおきてきえゆくとよしのの
[illegible]のことにあるもの有のほ
女のはゝ思ふ[illegible]
うつゝにしつゝ[illegible]
ゆふくれに松をまとおもひあかす
文流のへにしける女のひかるくる
[illegible]つはなき
よもとる[illegible]
人めもる[illegible]
かへしの[illegible]女のも

いまはとて男のこゝろかはりにけれは
きてふしにけれはいとあはれにみえけれは
んとてまちよわひとゝまりつゝ歌前
ともえてまちかねていかてさわかれし

女

あかつきをまちしのひたる隙しらぬ
つきとしるへのたのもしくおもひける
超これひとめしに
おしはまとたのめ人いつかはと
とりまてぬもみやあれやむかしすめるん

源さねあきらたのむこと
なりにけるさまをみれは

中務

徒まちわひしねとかへてみかまほしけれ
あまいさかゆへとゆかしきとかへりしもとめん

藤原信明

しかくとよくたいしもあらす
いかちをといつみのゆらのはなさき
はしめてはつかしとこそめをそへかすかく
ましきとくるまのかるやもとかけても

かなハ名乃よりおこりて仮名
東院殿
絵ほかにも人々ありて
松乃しとものをつゝみよりとかへ
大猷院國經卿の大納言に小野女
手紙文いとしのみかなりしとも仮
てしもあさまれてかゝる書
この女仮名ハ體古風大下りもの人々を
かるまゝ仮名の女のよりたるものこと
かるさてこまても人の女乃この

つゝみもみなの華陽の女にさい
まあそひあさまかりまちたくひ寿
に母とみえしをこれまてのとも人々の給ふ
のときつねに仮名わかるか
手紙文
むつかしく人々もつゞきにおもし
いのちなかさのそこくにみえまつしへ
在て
よめとひ
大橋梁女
敦忠母
うつくしきにかたまかなまとの
在女仮のまとへ手ふの物にハ

あはれやくのつかひてまつりける方より
まうのほりて のりけるにつかへまつりける
女よりくたんことゝもおほくありけるに
しるしのわかれをとよろこひけり 下
まいりけるにもと侍りける人のもとゝいひ
みやすところの御まへ一条のみやすところ
きこは女になりてかくこともなかりけるを
まつりしたてまつるみやこへのほりける人の
かへし 道のまへ侍りける くらゐとわか
いつあるやもとすゝむつれつ見えつゝ

しらぬ

清原諸實

くらゐとうまやのすけになりてはへりけるに
かへりことしらせぬともわする
名のみ あまた人しりぬ
かくしるもとりかへしつゝも侍るに
みちのおもきぬやまのこのもとなれ
人の許よりつかはしける
萬のことも おもほえ ちかのうらの女
かへしともかくもいひつかはし

大ねとるつかひけるたもとわ　真忠

ここにめしよせて舞わかせしの袖

はりそへたちてまわりの舞ひ

もとめ女

うちふかつゐ心毎はしめて桜の花

このもとの山もとよりまつつく

みよしのの花よりも春の風と桜わ

わきこのあそひそれわかうすかに

もはとも、すかるとたてる　まよひ人　もと

乃くゝりくるのふかきのからのふかれ

南まもしくすてのさしくふ音すとも

つまくるめしとりもへふ

わしまかいたみたるひしみや

入まし人の見まくしほしかし

女のたまふあめそめとつかまつりの宮

しとき　こまてあそひすかん　伊勢

もとの山花もさき代のあれしそれもし

さつもしたつまとへやつの心ん

憂きこしは　つれなし

めつらしくまれ人をもとにむすめありつるの
ありぬ行きのなかくにくやまきと
過きしよ滝の人のまつくあまくなかりの
わかくはなきうちも難をよせて
在原業平朝臣
かたへ人しきと
志ありけるよるのつれつれ行の離れとそ
いはやの行かなしと人はとふなる
平中興
悪しきよ思こめつらくあまりにもなきと
人はしくとさすかなくわ
つらしきをあまりつる女にしたる事
侍りしにわすれつつよみける
菅原輔下
おほかたのうきみはいまはとひてもなわ
もろくはかなくものこほらむ
君をおもふ心をひとつとゆきて
そうれしくなりゆくやとまつ
親のをしふる女とせむかひのよひのをとこ

しきりに人のもとへまかりけるに

よみ人しらす

なほたのむといふ人のいひおこせたりける

かへりことにいひつかはしける

なほたのむなたのしらなみ

伊勢か

きのふまてとふとなりしかのかたの

みつのうもれ(?)いはなかれ(?)

思ひをもいはてやみなむ女につかはしける

男のもとより

逢事のとをくなりゆく(?)思ひ(?)鶴(?)

しのひつゝ(?)すみける(?)

あひ(?)みてもなほ人をおもひ(?)

つれなきことわりありける(?)

うらみつゝ

とし人(?)わすれにける(?)

たのひとも(?)

ゆくものは(?)

人のもとより暁に

閑院左大臣

人のむすめ(?)

うれしきことを(?)

わかれせし袖ひるまなくつゆけきは　貫之
はつ秋ふかくしらへふかりし風の
こゝろまつらむもみえなくとちきりの
女のもとへつかはしける
これまさの朝臣乃郡下
人しれぬなかはいつともなきものを
ふところもちかきあふさかの関
返し　小野好古朝臣女
ちかけれはいつかはこえむ人はあふさかの

うかりこしよをあふさかのせきのせきに
女のもとにつかはしける　業平朝臣
まてともとまらぬ人はさしもこぬ
名もなきにいとゝしなれなかる
かれぬるにかはるかとこゝろもとなく
しらてたゝつれなきもうらみつる
うらみつゝたにこひしきを
小野小町姉
かれなはしらむ
つらきわれをなにゝたとへてうらみましとしへ

人めたにしのふるやなからやはみつ
西宮前左大臣かたりける人のもとに
はつかにも見てける人の
ともすれは夢のうちにそ思ひいつる小一条右大臣
うらみつつぬる夜のかすはしらぬかな
ねて
誰にかはかたらむ人もなき
さつきやみいつとはしらぬ
あかつきの月をなかめて
もとのみつからしらるる

きよみつ
たえまよりもれいつる月のかけさ
わかれにしそのおもかけのしのはれて
左京大夫顕輔　伊行
家隆　滋幹　ちけいとうの女
ちきりおきしさせもか露をいのちにて
あはれことしの秋もいぬめり
夕されは門田のいなはおとつれて
かゝけるかけのまちにしも女
いつまでかおもひしまゝに

在原元方

夢ならはまたも見えなむふくるよを
いつはりのつらき心はしらねとも

壬生忠岑

かもめゐることもなくて君かよに
君かため心さしふかき人の

戒仙法師

あかしひのつもりつゝやかへるらん
いまもむかしも浦のなみにぬれつゝ
庵せしことをおもひいてゝぞなかむる

ままつたえ月になりぬる人をまつ
はるかなるとひとのわかれをそふ
ふかれのなる

つらゆき

月のうて君をいかにとおもひつめてかと
日たにふる心のうちのかはりけりと
おなし所の宮のうちにつかへて
おなしつかへする女なりけり

又

伊勢のうみにあそふあまとなりにしか
のまに藤衣

かくれともふかき君とあるわかなくそ

声しるし　こ秋のゆふへ
わかれこそつらきものなれ身のうき
秋もいとはぬ物のこそあるへけれ
人のおとこにまとひてゐてあひみて
つかはしける　右近　季縄女
唐衣かけてたのまぬ時そなき
人のつまとはおもふものから
人のもとにまうてたりけるをとこに
いて揚ひあるもとめしにあひまほしに
わすさしみかきのわたりてかれに

つかはしける　前東宮亮
めのましをはなれていつ秋と
まさりまさりそ経あひてまて
河公さまそ伝りける女のもとにぬ
やりてけるはかりみをつかはしける　藤原清経朝臣
いつるまてつきをまつとて一夜の
思ひくらふく人はわかれて
おとこの心遷りてよりてまて
まさらは　右近

つらきをもうきをもよそにみしかとも
わかみにちかきよにこそありけれ
女まうてこんといひつかはしけれは
なき名たつ事の人いひさはくめるを
いたつらにたつなはよしやなき名ゆへ
まれは
在原元方
あたなりと名にこそたてれさくらはな
かなしきことのはかりにそ
いとはるゝ身をうき草の根をたえて
伊勢
あすかゝはもともたのみしふちせさへ
返し　贈太政大臣
[illegible]
かつきえてふるの(?)
女四のみこにつかはしける　右大臣 九條
おもふてふことのはのみやあきをへて
かはるにつけて
返し
あさつゆのおきてそわかるゝ

よそへてもこゝはことはりあはれなり
きこえつかはしける女の文ことに人のよ
文のかへしとてとは思ひつかはしけるとに
ひとりくらすとてよめるかはり

贈太政大臣

松山のつらきなからも浪こえむ
ことゝはゝみのゝあつまのそれ
宮はしのつかはしける女にかはりて
て物いふとことゝひのたよりもなく
ますゑれい

枇杷左大臣

東のまかきやかくとそめよといふの袖
ぬきもしとこしおもふへく
在つ

伊勢

いつくとも
しら雲のしたのはらをゆきてとふらむ
ひとりしあるをつかはしける女乃許
よみ人の心をはなれぬかはらのそてのかへし

はなをもての歌下

中納言長谷雄

きみかたまのをのなかきよもなかつきの
かさなるものとおもひつるかな

歌たてまつりて　摂政太政大臣
あまの河[illegible]山波こそ[illegible]
ことゝいふところにて[illegible]
在[illegible]　伊勢
岩もなく[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
たち[illegible]
[illegible]

[illegible]
人[illegible]
[illegible]　人[illegible]
袖[illegible]
[illegible]
[illegible]　前大僧正慈円
[illegible]
雲井[illegible]
[illegible]

在原ときはるか有けれは
つかはしける　藤原かね
あはれなるあひ見ることのかたかりけれは
いひつかはしける
こゝろしまと　源たのもし
夢のことはかなき物はなかりけり
なにとて人にあふとみつらん
いひはへりける女のつかはしける
思ひねのよひよひ夢にみえつゝそ
夢よみえせと

たゝときのまれなりしことゝゆめ
在原
ともかのきみのもとよりまかりて
いつれのよにかよひあるとわれ
寄せけれと　こゝろかへり
むつましきへのひとことあるをまつ
うきたるかひもなかりけり
紀内親王　一本三月みこ
はるのよのあけぼのさまよきて
まくもたちゆくのもとまての

人のもとにまかりていまはとてかへり
もはべりてかへるこよひはゆめにて
ふるさとへいひつかはしける
さらぬだに見出しき
梅のはなちるも宿の人のみなきに
つとめよとやいはんとしける
返し
なにはのなかのひまもなき
たえずなみやなりぬるやなりける
いはでしはすなはちえあはぬとかへる

人につかはしける
わするなよつれなきをえきよそとも
むかしとこよやいかならんその
返し
なにしていまこそとぞみえしける
ふるさともとやあるいはなかれ
いまこそあるまじき人もとひつかはし
もとつまのわかれいひわかれ
てやまいなくて思ひていひも
まつりなかりけるにこそぬまま

まとひてまゐり給ひ
うつまちやくるちかの橋よりなしくは名
おもふらし侍れとたのもしきをとめ
人の淀ゆまつのいし給
右大臣
かゝる絲竹のかよひとしてなる御鐘をこ
なけとひらかき物よりて有ける
浮世とはなくなくとよつゝしりなる
御成後法性寺殿
つかひの君の前にしてわかつるゝふしけのは

あさつゆまくふるゝと風ぞふく
あひしつまとはなる人あまくさ
なれとくらるしかつとしをなの
こゝろのわけそ人ちともまいる
うけたまはりける
よみ人しらず
一乃宮の紀二条井いひつかはし
いまゐとともかゝりて乃あかりの有ける
九
かへし
とふとをしいひておやかるし忠をさへ

ちとせのくにもまつりてまつやいはい
はとこのうきまへくつへるかへ
あまりなれは　　小町
いつろうねみるものは世中の
ひとひもたすまゝめかね見かたす
おとこの心つくし思ひのうちよりいてたる
もと女ちか波たかわまとめもとも
きめとにひつうふきまくれい
よみ人し次
わすれ草なんとおもふ心の風すらは

つまこあかき人をとうくるまをやい
よみてよみよむへのそふるはよ
あかへともかくとよむとむとせそ
なよつくしかる
業平とも　在原業平
ちはやふる神代もきかすたつた河からくれなゐ
こととも花にもあるいあつかふ花かふ
かんのや海とよみあまつかせ風を
在大下
おもひしいくかあいつれなきとりかれ

あやなく君やよしのうへゐ紀
かなゐのさきは北の大かたの風年
きみとふひとつ行年
元年乃みこ於ゐ年寄
あふさ紀としもあかるとしれ
ちるみのなかいのちのをうのま
もと紀かにかしましもとまて
かとこ乃もとにつかし子年かな
よみ人しらず
春たかいつとまくやまわ

於ゐかしみつさきつれい
女乃ものにつかふる
源当純
あふみのちとせのもしるらひもこの国
きよ紀乃ここいろのいはわかるま
紀乃　志っし之家
花しくやさやいさふるあらそふ
きよ紀乃あやかいみとしまとや
女乃もとにまのわかりけりやあかしま
のとのこいとひらまして

よみ人しら
流れゆきを思ふ心のまさるかな
いそはくるともいとふかゝりけり
あまよりの内にさかなりけれ
いふ人は流れつゝなむ
友大下
ほとゝきすおひ出ぬとゆふ月さ
ひきまよひけれはひとしれ
いひつゝなみ女のとかはすなほ
といひはわかれは

大臣の家下
ゆめたにもみえぬひかすそすくる
わすれいるもの恋よりほかに
さるひてゝいひける人に
宿木のまよう
有好
ふるのなるほとに思ひのほかはへ
人まかのたえはひのかた
ものかひはつらぬかとこといひみ
ひていてまきといふともいひ
さてもいへといひはかれ

よみ人しらす
小山田のなはしろ水はたえぬとも
心のいけのいひははなたし
方たえよ人の心をなをさし
つまのわたてゝまて流れゆく
手屋れと契しかとも人もなし
のよしいへとも心はかわらす
揚いとひける女のもとよりとつ
かくて流れにけるとも
源重光朝臣

あまをとめかとも人しれすこそ
ひきとふかる人もかけのあふせ
人の絶なかれわかれまかれそつ
かいしぬる
あひ見てはとかくもやしいひ
及上このまつの
ふかきものとゝかな
よみ人しらす

後撰和歌集巻第十二

恋四

女につかはしける　敏行朝臣

ぬる夢にうつゝのうさもわすられて

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

女につかはしける　枇杷左大臣

山しなのおとはのたきのおとにのみ

[illegible]

[illegible]

[illegible]　紀友則

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

たえもなくめもなき浦の波出て
のかたにくもうしくつらきか
あらはれわたるかとこそ
よみ人しらず
あきのゝ秋しりけるしきりに波立出て
人はほとしもなくみなもとのわたり
あひしりて侍ける人のあつまへ
まかりけるにあひ見て
さきたてゝありつるのよ妻おきて
しらねともかつなれにけるまで

返し
松よりもあはれしいかしきにおもひ
ききかもりのとちおもひかなん
つらきをあわれにけりたこの細き
といひそくとうちくるを色につれ
せよとて
平中興かもとに
今はとてこそ急にうちよせ鐘
うらもをみんとおもひとてきもを
返し
源臣城
わすれなるぬめをうつゝさへつゝ衣

なかいつゝきかほとなむわかるわ
物いひ侍る女のかへしをかへしか
つまとそ　よみ人しらす
ことしもめもやうとみつゝ
かひらくしひとたまれかひくる
おとこの物かといひつかりける女は
のあらぬ女なとまわれきゝれ
ともきこつけけれやかをまもと
もあはせはなわりまゐ大田のちかとか
みるのをときたるもとそ

足引の山田はなかりけりむせて
なとしけるをみるにつけておもふ
猶ここにつかうまつる女のはしたなき
いとくるしかりけれはまつ
かくなむ
まつみえしとをとることき君の上
松のかへともみつのひとつをま
女につかはしける　贈太政大臣
ひとりはいとふかきそめける物は
よのなかはうきものとそきこえつる

返し　伊勢
わか宿とたのむよしのに君しいらは
おなしかさしをさしこそはせめ
題しらす　よみ人も
くれなゐに袖をのみこそ深くそめ
君をとふしもおもふかひなきを
つれなき人のあるをうらむる
くれなゐに涙うつるときゝしをは
なとゝいつはりと我思ひけむ
かへし
色まさるなみたにこそはしらるれ
袖しめし葉としみし梅を
思ひはつる人のはしもあらはす
かゝるとし月もへて思ひ乃も
いおもひ行るかなしみもそつ
いひける
ひとへ乃野辺に清水ひとなかる
しらぬも物いなるをあはれ
おもふ事はありてかひ乃池
つゝつ　よみ人しらす

雨雲のよそにもなくかゝる物を
袖のしつくになるゝなるらむ
方かたちもよく男のことわれは
逢ことかたきおもひにしつみ
おもふこゝろのたのしみもなく
恋ひわたる人のうへとも
とりまとめていひつゝなるらん
ともおもはねとたゝことゝいへとも
ひとしれぬものゝおもひにおもひ
歌をよむ

こともなき源氏のいろこのみ
見るへき人のけしきもなく
女の詞よつゝしめる
何よりの大事なれとも
まめやかにけしからぬゆるされ
恋し　伊勢物
すみのえにおもひかけぬかゝる
なりひらのよもすへき物を
つれなき人のなけくつゝ
恋しきとおもふことの

きこえしもきこえ給はねはすれはしるこそ
在て　　攝政太政大臣
もしやとおもひ侍ることとも我すへ
うらみつる　ほとはまへつる事の
定家しかと　その道にとも
名ところはこその紀くはしく物語は
物すへき程にあはれとおもひし
立ゆくすゑこゝろもとなくおもひ煩
しるしのりあはれ物かたり
故あるさきのちりゆく流とめていつも

しう給ひにこのことひいわかれつゝ侍ると
いひおきけれは　伊勢
秋とこそや　なのはしもまさにたちぬかな
思つはあへぬ物ゝかしこくて
こゝは乃するもはおかあふわたやあきと
久給ふ
乃る葛の恩出して兩宵ことは
いひおきしるしにまかせわかれ侍
たいきつまて　いまみ人も
しらぬ春の哀にてあひあさとかいも

きかへりもちかへし称なんとそおもふ

人の中よりつゝしみけるに

ことの葉ははかなき橋とさへ

おもひわたるはたゝかしこけれ

女のもとへつかはしける

紀忠岑朝臣

しら波の寄する濱のまさこより

あまたやおもひしるへきなる

女のつかはしける　大江朝綱朝臣

おほつかなしまぬ心をいかにせん

やくもし人かなみそめしつらかな

伊せをみん人かなゆきせそふ

你とやすそつかりける

贈太政大臣

こひわひぬ思ふかひなき

人のかなしみはそれによりける

返し　伊勢

よそにてもおなし人のうへならは

あふことのなさにしひかはら揚もと

深養父

くちまつはしくなみつもそつまて

もくい　年ふるとのもすみ　中興
もとこうめかくまゝ山にまかるへい
たとへくゝのまゝにをとゝせ
よひしかまゝにけるゝはしめを
ゆへるまへ　伊勢物
わたへても事はゆかしるにろ
つゝもふかいゝたの色成ゝま
松ことよりわかれはしく物ひゝ語
海女もなにしとはすまゐ
須人一ゝ

こゝろ須磨の松をとりとりたとく
き乃ゆみきのをきつゝぬとわわ
なり
ときは松のれ松のえとうしも須磨す
おもひはいふもとこやも松はん
たゝ海こゝのよゝの語りまて年へ語
ふ人はつゝりなる
みやこのいつの時誦はとしもとへ前
かよひのまゝ見えつゝ前の松
なり

衣通姫の歌や歌はゝる小野小町の
うちそへるあはれなるやうにてつよからす
いはゝ大こ流のうつる女のなやめる
ところあるに似たるといひしかは
はつよからぬは女の歌なれはなるへし
よく似たるまひとつにはまねひ
きつしとあるもとのこゝろなりといふ
ことはりにつけても色なる事はつゐに
あり染ても尚きえし花すゝきほに
とまることもおほくかゝりぬる

色
ものゝ心の花になりにけるより三条右大臣
あたなる歌はかなきことのみいてくれは
いと思ひつゝ色好みの人の家につゝみ
おもひ事に人しれぬ事となりて
うつしもいつ
色見えて人しれ
花すゝきほに出ることもなき世を
まめなる秋の木の葉の
埋れ木の人しれぬ人はなつかし
うつる
あつまのたちかへ

まちとなりし梅はおもかけとその人の
かこはよそにまされる梅にちる
なりて　源通茂卿
君かためおしまへこそゆかるゝ梅のはな
いつまても匂ひとゝまれあらん
春雨のふるをまつとしうへ人の
かるものはかりけると夜はのさむしろを
人のうへもやおなしうき世の女の
もとにつかはしける
以上一つのこゝろ　常家

鏡山あふせともなしきのふけふ　常紀
くもりやうきみえんかゝみとふかすは
あひみぬもかほる女の人の名
立ゆるゝもりかりけり
年ましく又乃歌下　希世
梓もなく人の
かきかねしみちをもとめてゆく
人の詠まれて行きかひし道
ねはいまのこゝろみて流かしける
若葉賦圖

稲乃田秋のかりのめぬれしもさかゆる
いつくいくもとちらしつきもし
年乃うちきえの庵りくりかへしはかな
まつ人もなしつゆしらすなれ

中務

秋風に吹よりつらきしはあまの川
たきつの葉をかたくいかに見まし
雲月もえてもえつゝしけくなる
人かつたしらす

よみ人しらす

君かためすてしいくよの庵めくる雲月乃
かくとしものもかつらうちすゝみの

女かへしつゝしかるか

なほくよ思ひけていふうくも
ゆりまふきめかそうしもへなれ

庵し

うこきもひてはなかたなかつけれ
こふなれめまさいかくまめたまく

女かへつし こまかれ

あさくとものひさのわかれわかれせまる

あやしく風を思ひつゝ過ぎて
わすれぬのまゝになりゆくをおとこに
つかはしける　兼輔中納言
こぬ人をまつのえにふる白雪の
きえこそかへれくるおもひに
わすれ給ひにけり女よりつかはしける
ちかひし人しまと
あくのはしうちにもとめてかくすまて
みつまめへつましおもひもあらはなる
花

といひやりけるにこのいへの兼もとに
かへしはいとかなしきかへりことにつかはし
人のいひけれはいとあはれにおもひて
はかなきにつけてもおもひのほか
わすれかねてそのよのことをおもひいて
あはれなるをりにふれてもわするゝ人に
いつのまにかはかなくなりにし
またあひなむとおもひける女のもとに
とし月ふれはなるゝまゝにやまさる
しとのみおもひつゝ

おなしくは君とならひの池にこそ
身をなけつとも人にきかせめ
女まかりにける
かけろふのかけのみゆるはつきはなの
なかのとゝきもなをたえにける
返し
ちらのみならくもなかのしはしよ
なかしのうくもまたいまたかれ
さかのこきのうへのつらならは
ちゝのはをいつしれはえ

けふして
源よしつねの朝臣
あふみてふかたのしるへもえてしかな
みるめなきこといきてうらみん
返し
春澄善縄朝臣女
あふ坂の関ともきかは
あふつきておもひきれはしるへし
女のもとよりつかはしける
よしつねの朝臣
足引の山した水のこかくれて
たきつこゝろをせきそかねつる

返し　　よみ人しらず
こりすまに又なきなはたちぬへし
めりしもの松るもとゝまことて
人のもとよりのかへりことつかはしける
　　　貫之
あふつきのあのましのはしら木
おきそてそ人まきかなや
返し　　清正
松おもひ人のかしこしよ
そのつきにかもおもひきめ

女のもとにおとこかりつかはしけるや
はくとしのちる松のとはうとしとも
つらしとまつみえ
高砂の松といひつゝとしもへて
かはらぬいろときかはたのまむ
人のこゝろをもとしにまかせつゝよ
こひけるもとあやしとおもひけるに
かくひかみはへまへつゝける
　　　つれなき
風をひとく松ふるゝつま遠

はちかはしてありけれと男はこの女をこそえめと
おもふ女はこの男をと思ひつゝ
おやのあはすれとも
きかてなむありけるさてこのとなりの男のもとより
かくなむ　つゝ井つの井つゝにかけしまろかたけ
すきにけらしな
いもみさるまに

返し　くらへこしふりわけ髪もかたすきぬ
きみならすしてたれかあくへき
なといひ〳〵て
つゐにほいのことくあひにけり
さて年ころふるほとに河内の国
たかやすのこほりにいきかよふ所いてきにけり
さりけれとこのもとの女あしと思へるけしきもなくて
いたしやりけれは男ことこゝろありてかゝるにやと思ひ
せんさいのなかにかくれゐて河内へいぬるかほにて
みれはこの女いとようけさうして

たまといひせてくたりまうしける陰
よろつま女恩ひとけてのこる夜
の夢のまゝにおもひとりて見えける
かなしのひとつてしかける
ちぎりける夢さいつはりはいつはりそ
うらみまくらにもとめやなわぶらん
ゆめそつくるたまくら舟はちぎりてと
見しわすれてともとわすれしこととまて
とゝひふかへこきまもしてくすかとん
もののうかやまもしてくなんなきまつる

とひまくつまてたる舟はかゝにのそ
つゝうら
なかひの夢といひしもやまとふ道
ふるくふるくなりてきたまふらん
やまとのつこりになる時の国の名
かを清原のもとめかきもとも入と
奥てやなやとこゝにわたしてなめし
とゝ海より京にかへりまたの日なる程
まけむもとめしこ返しにやりもんて
まてもわりませ去まの人の道

たてまつりける　前東宮忠房卿下
いつゝと狩よらきにまかりかとも
野をなかのみちはかはしに付かわ
をとこつかうまつる女乃返事よ
まなやのふしもおとひれ侍て
きは
ひきまく程乃かりまもをかりまほ
くいこ地まりてふくもとせむや
ある人のむすめにまう有けるをとめ
のよりつかへしかとものを
きはこりやあたるふ女にうけつうける
よみ人しらす
関山の峯乃杉むらすきゆけと
あふみはいとゝそはるけかりける
あまたゝの狩下なへのまもとせ
てふこともこそ侍りけれ
思ひ出てきゝ人つき侍山乃
こゝろまかにはかなわ
いとゝのひとものわかあてまて

まとゐせし物うしとこそおもひけれ
うきよなかれぬ人のこゝろを

返し

うつせみのよはかなしとはおもへとも
みえしものをは物をおもへは

うつまさにこもりて侍けるに人の
もとにつかはしける　小野道風朝臣

みやまへふかく思ひ入りにし身なれとも
よしのの山はなをそこひしき

女五のみこ

忠房朝臣

君か名のたつにとかなき身なりせは
おほよその人になしてみましや

返し　女五のみこ

たえぬるとみえしあひみる白雲の
いとおほそらに思ひけるかな

返し

まことにははしめてこそなかれぬれ

しらなみ

あふことのたえぬるころのなみたかは
たえずのみ人のなかれてそゆく

さくら見にてまかりてはかりけるにもちや
まつけてをとこの丹いつかりかな

大輔

いまこそやこめたるのわかいとかくまれ
ひろまた乃まみもとのもをかへこしの

大輔

の御もとにまゐりてまかりけるよ
はらとまとおほくいはのくらをそ文乃あ
しさりつのしかの所
いそつゝまた立田のうしらしをなき泡

紀忠親下

あさつまに紳けるはるゆきの

右

さらかの小袖乃めつらしく波乃

大輔

なかつまをあつま吟もかくなり哉
よしのかは紀下とこしにあくまとも
のきとらとそ文乃あしきりつかへる

花乃侍

もとのくもみなるおかもよろづかはなる
請たかあかきいのちあすなるをし
思ひのきもかはしとあのきかかれ

道風

なつくいめすゑろといふのかき葉ゐのわ
よるのしらてやくみ佛しもく
橋いつれとそまのわたりつゝ人ゐとし
ゆるされてはなのもゆかゐのつまにや
くれまはとしひかりてはるまて
陽るゝときまちとをしけれはをちかた河
くるまの行くるあまをとすもん
色し

大輔

なきゝ河いつちまつともわ海のゆき
くなみうこくなみもとめやしらはせ

大輔の海よりいつなみ

敦忠卿

池にみえしひいろことゝもつるかな梅ゐ
くえこもりまともみのし
としへまつる

後撰和歌集巻第十三

恋五

題しらず　　左京大夫

枇杷左大臣の也清本に書写之候歟

伊勢の海にあそふあまともなりにしか
なみかきわけてみるめかつかむ

返し　　　伊勢

おほろけのあまやはかつく伊勢の海の
浪たかきうらにおふるみるめは

流てもあふせありやと思ふ人は

読人しらず

つらしとやいひはてゝまし白露の
人にこゝろはおかしとおもふを

題しらず

おもふらん人の心もしらなくに
なかのかはらぬやそれよりもいかなる

小野小町

心からうきたる舟にのりそめて
ひとひも浪にぬれぬ日そなき

女のもとにつかはしける

かゝる

梅つやゝ

こゝ鈴虫はなきのこゑにあはれなるまさ
れけれとも秋もまたあはれなるゆゑ
あはれなる事となくてのひとかたにならは
そこはかとなくてまよはるゝ
かくしてかせの人のむしはかなり
よみ人しれ
いまよりのひとへかとは蓬か
かれ野の塩はなのさむくらん
題しらす
うたゝねは夢のはかなき事を

秋の夜はうらかなしつまをこひつゝ
女のもとにまかりたりけるに
もとこしをわすれぬるにやとはかりいへる
秋はつかる
兼輔朝臣
秋の夜の草のとさしのわひしきは
あくれとあけぬ物にそ有ける
題しらす　よみ人も
いふつくよつゆけきは秋のあれ
草かとよしにかゝる庵や
桂のみこにすみけるあひたに

乃たくらへひかしのねやのうちなるさうしのまへわけてま
ゐ、　さたかすのみこ　貞数清和御子　母行平女
人しれす物思ひのなかの給ゑ
秋乃草葉もまとひつゝわかわ
母ひなる人かつけゝる
贈太政大臣
さつきのよおもひのほかに秋乃よの
あくかしはしもとおきつゝ
きえてこのよにつゝとをいつまてかわ
けれおとこにとまつ秋あひそわ
とひとつもなかにとわと
うつしたまは
よみ人しらす
草葉にはたまとみえつゝ侘人の
物おもひいつるとゐ
おとこのつらくなりける袂の涙
かはらいつかしけ
梅のやめ給のよみかはしける
おもひのきよもたゝのかは
女乃許よりわてえあり侘て

流かしける所

ありしつゝにあまりつまとりたちも人にあら

人めかしくもなしあまた人々のめまそ

女は楊りまかとこゝろをよせて有けれは獨

つれなるもしもしまさりて　いまひとわ

のつらし　人あまた

ありしつるつねにに楊もともよ何乃

をさの人忍楊とおもひかるまかれ

女のかへりつるまかくさしとすへくつうるる

のりよあへい人のこへかわくしらし

よろつへぬものゝはゝかりぬと思ひけれ

ねこ流のつくしもろもとに女のおやの縁へ

まかりわかれいとも心もこまかにわかれくるよ

のつくしける

いまめかしきあまたと君しかるあはかりなく

しひき聲りかへるありとて

一条の后はいとよき花のやきとてひとよ

后つまつる様はかりよもつるなるを時

てやるとて　一際

恋つかへい新しきつまかへ古もとりかへそよ

むかしをとこうちものかたらひけるわ
なりて　伊勢物
新古今にはとこなつのうた
ちかくはなりけれはとまるなとかくうた
人のむすめをあはせんとかひける
りょうくにあるにいそちとさすかに有
なま在中将をよ一よ人しまて
人とみきさとしさひあさまし
むかしをとこの心もしらて
みな知けたるに女は物いへとはする

かくてもまてと舞はせんなとかく
さらにさはつゝしみける
新古今集さりとてはひとをす
うらむとよみよしなきかなれ
人のもとにいかなるかたにつとめ
てつかしける
つれなきをわかことあらへき六
千代まへのうたに物かたりのう
思ひのみそよみける人の我のなりにし後
かくて東のかたへつかはしけるをもとめつかはせる

もとくやまの井のあさきこゝろを思はゝ
君のかくれよなくれやましや
在
やまとをとめに君かまかりわたりけるを
いつの程かのわかれとてかくなむ
仏まし見てまたもとひとはかゝる
人のもとにつかはしける
源英明朝臣
伊勢の海にしほやくあまの藤衣
なるとはすれとあはぬ君かな

えかたかるへき女の家のまへよりまかりわたる
つまありとききていひつかはしける
いひつかはしける
藤原有世
糸とよりかくへきこゝろはかなきを
かもをなかしとふかくも思ひつゝ
書しをよりて人に
君のあたりまて二井よりてまかりわたる
うちわたしなかき心はやつはしの
あさこの在事りつゝしけるかな
俊子

おもひそめことは葉山のふもとの
はなれたる物と思ひし中の関
なりしかと　かの中乃歌下　菟裘
思ふてふことそうつゝに見え行乃
よそにみる人のいつはりいはし
おもひしれとさらにたのみなき人しもを
わすれなましといひやるらし
おとこのやまひわつらひひさしう
てひさしくあらてつかはしける

いまはとてわかみしくれにふりぬれは
もとくへきら春あれいとわれ
返し
ことの葉もしもにはあへすかれにけりこゝは
こゝろの風もさもありぬへし思
物おもひける人の心に
わすれんといひしことのはなき
いまはとてわするゝ時におもふ物さへ
うつりゆくなせとのまことあきのくさ
吹かへりぬれかゝるとくつすへけり

女はいとうしと思ひけり
もろこし船のよりくるまてゐたる浦に
むかし男ありけりとも人にいはれぬ
西の京の斎宮まうてけるにいとおもしろ
時なりし男ありけり思ふことなりける女
のいはく東のこゝろさまのありける
人の女の御かたになりしとうちなけき
ましてくるしとしも思ひける
男のこの君に
なにはたちの浦のもろこしの濱よりくるふとも

とはなくにあはれなりけれ
男こそわれのみおもふとなけきつゝも
いはるゝ女のなかにおもひけれと
三とせとのわかれはいつかなくなれ
こと女はこひつゝまつこそまされ
ほとゝきす
三月のつこもりに春宮のなくさめ
とはなけいつもせしかとも今宵にあかぬ
歌しらせ
五条わたりの局にたてて物いひけるとも

風よわほのにたえまのとよみつゝ　伊勢
なし
めつらしく思ふ風まちとたえへつゝ
庭ついゐる家乃松のはるの嶺めの
吉友の袖よわもまつにけるを
事りのつゝしろきね
貞もと（元）のみこ
ゆふへとさもえてめ須らし松乃声のあやしき
うちきとまてもなにも[illegible]さとん
在てい
忠房

松山は思ひしはすゐゆれたちぬら
かたの乃袖りのいそもましも
女乃袖よわとろめむ花ゝひゆきとふ
とりたる身八い
躬恒
ゆめのうち思ふこともとことのは
いつ秋風吹てもろともにかね
かくとこのへのうちよりて闇そのいた
あまかける時けなとこの人をともなる
雁のなきつれてはかなる

よみ人しらず
人をかこうるもあまたいひつかはし
うきこいまうとうましつくとおもふを
思ひける女の許よりきこえつかはし
ける歌は
足引のやましたみつの木かくれて
たきつ心をせきそかねつる
おとこの心よりもたのまれは
伊勢物語
わかう人ける時よりも物のうちのましる
うきをしのひかなしきゆるにうつりかはる
あやなきまうをはきて女をいふとせし
しいひいふそとやかれは
いふもとしいひいふなまひれいかを
おもとめとこをのはよとのわれをま
男のいかてえまうしこそめおもとに
をたのれはよみ人しらす
あすやあるへきやともあらしとこのはなの
まつのかれ思ひもとろしとも
とまりしときかはよこのはなのいろはまされ

または
さみて梅く弱の有ける梅をよみ
ふるゆきのまたふりそめて
梅の花ひとりさいたる人のひとしれ
ずおもふかけしこそきゆるにあるかな
よふともよしと思つれ人は
年へてもわがまつかひなきぬれば
ふりまさる人のあやなくとしへぬる
いとゆめひたすらあまねく男の
きつつはしつる人あひわかれて
まつわたらぬ
君をおもひてまちやる時にひとりきて人に
かへしのうちよりまして君かへし
公頼朝臣下のまへのわかれける女の許に
つかはしける
寛湛法師母
あかなくにかよひぬる身をうらみこそ
いつくへとゆきてゆくべくなりけれ
さそひける人なり
かへしとて

人ことのたかくなりゆくころはなすはする
おもかけはいつしかつゝまむ
志のひとかたにかひ侍る人とのきゝ
てふとたのみともたのみけやらん
つゐにはいもうとの心すまわれて侍ま
らそおそくなりとしとてはわれて
きては　かねい内侍
人しれす思ふ心はしらねとも
まことはなきにしもあらぬこゝろしを
位　兼盛朝臣

神はためよ身のいのちさらぬ涙の
うつりは屋とうきもともつゆのうへ
女のもとにつかはしける
よみ人しらす
きえもあへすはかなき我身かな涙の
わかれてふかきまさるよりも身
位
ぬきもおのへ人のよいとしふかくなりぬる
わかいのちきえもせて物おもはれ
つねよりもまさりて物おもはるゝかな

源人のほのかにみえし人もしらて
てふりまわとよひてや待かれは
左
まえのふちをりこえつゝ唐衣
きていくねぬるまもかけしよひは
左大夫
此原にいそきめひはわかれし
内侍
いつくに
ゑめぬるともあるかもひるん海の
あまの拙みるをもあまつる物也
大輔
よつのりしる持
左大夫

今いたやこは山にてもさらしよえん
かきのうき息もとかりまきのせよ
右
人いはとかへ山かくれの郭公
あらはぬ里に待つつくへし
左大夫
よつのりし歌なる
中務
あましたてまつりまし持とあふさて
かつこもそこみふつきてや海ん
右近
りよほのかりしらぬ

左大臣　左小野文集

思ひわび君がつらさに立よらば
あらし人めもしもちらさなん
まさるかなしさとあまつまそへて
流ともで　いへるなし人しれ
篤行乃よし此ハ大臣のうたとも
もとのかのめいふうことはゆふあめ
こと女よ物いひとほえんもや
仍得物すへからず
よし物乃歌人

めもみえしひとなきいのあるたくひもなし
まはかりきたいひもあまりにもす
これ　　中務内侍
まくらのへめ人かきたらんめきしはね
おもひならへことのはをさらん
題しらず　　小野道風
おほつかなさとりよかつらまこ
かつきれしほとあるこふとも舞を
在り　　よみ人しらず
物ちらこそもえのこやいとも歌天川

としま一らひれなるてまかる
思ふこゝろありてよみ侍りける
きよつけの歌に
かのあらんことをとりて清輔
あさかりしもつまをわすれ
事いでまゐりて京極摂政良経
まつりける
中よりの召して
使ゐしいでて松のしもないたる
かちとりてもあらしとたつね
志のひて、思ひてもとの跡別当

りあひくゆゑとみすれ文のあ夫下さい
し侍れい　安藤のくつの歌下
いつはりてかくおのつのことゝもよ
人つゝかすてさのまかるへん
公朝歌下乃ゑひあをきのりくさ
侍るよれてゆこともわすれしあへ
しとゆくまかれいつゝこゝろ
雅忠歌下
中将ともよいとかゝしもしまむの山
こ枝ともこえん物もつらかなは

年をへて人のつまとなりて
侍けるはしつらひける筆につけて侍
りける　　きよはらのもとすけ
かへりつるまめのきにこゝろをさ
すかにやくのもとゝいひしをまた
人のまとはむのわかれにやあらむ
えこそはかりけれとりもえしの御
ようひもせてかへりにやなりとい
ひてつかはしける
よみ人しらす
いとやまる人のもとに侍りける
あくまでも袖のひぢつゝ
人のもとにわかれゐてあかつきに
はかなきはたゝよのつねにつかは
よるきてあかつきにかへるをおもひ
うらみてふみにかきつけたる人
人をおもひかけてそのまゝにはつる
ありつけもそのまゝに侍りける
うらみぬる山のはのあふと
ありくの月をみてつゝるの

二条のきさいの宮のはるのみやすん所と申ける時

つかはしけれは　藤原朝臣

本躬恒也清輔本
皆用此集之説
不可違之

たのめつゝあはてとしふるいつはりに
こりぬ心を人はしらなん

返し　伊勢

夏虫のしる〳〵まよふ思ひをは
こりぬかなしとたれかみるらん

[illegible]
よるへ人しれ[illegible]

こひわひて[illegible]山もこの

こゝろ[illegible]としておもはゝ

返し

山もこの[illegible]

[illegible]

[illegible]

あしひきの山した水のこかくれて
たきつ心をせきそかねつる

[illegible]

[illegible]

浮井よあきのこゝしたゝのまうて
為乃やる日人よりつゝわらふ
ゟゐまたにしるをとやまき秋草乃
うるあなかもひよりのめやうふり
花し
夜りりまぬうま乃神乃のりのぬ名を
君のおもひのかよやもくやまき
女乃もとにまゐりわたりにまゐらるゝ也
しなまくつつりくまま
つまわもまとふくもつのうまく所

みたれもゝもらすまいに心のれすはなまうく
為まもこゝろまもそまふそれま擣
つまらかしうる男乃かとわたりけるを
為乃やまへとふなまのわもまたぬさにほ
たまはは
ねりてまうくるとみえしに衣乃
たとひまよ絶ぬいとゝのや有まを
人かまわすりまそいつりの時
人なふうかえきいうつま草と隠ふくん
つまとなまし人はよりつるへしつまし

思ひすてられける人の許によみてやりける
名やいかならむなかなかになとふ名を
ほしつこころよりせんかたなし
返し
こゝのへのうちにもありしよりまさるあやなし
こゝろのくらふとおもひこそすれ
紀縁朝下の女にかよひける
らところと女にいひやりけるを成嫁
とふひにはまかりては
ひかりのうとうて屋居る女の

色ことまさるひかりはさすかなれ
かとこのやすんでぬれにこと男ちかい
さるまてはわすれにしをとこにあ
つま人のまちたるもいとみそつけくさる
あるまとめのはかへきもかもと思ひ嫁
をさきのあはいかなるけりつわれなれ
返し
おもひとまりのやんたまのほそかよ嫁
ねふつくとかまいとかまくてそれ
文女のつかうしこまかれ

梅さく宿はよそにしもあらなくにきぬ
きてはまつかりける人もありけるやと
返し
ゆきかへり人のあたりにいまそかりし頭給ふ
をおもしとゝめはかりのふるきの所
かくよめる男の思出てまかりてよめる橘
ふところにいれてかへりて
うちよせやくちはにしたへの岩の紙
あつくはえむかしまもはかりかへりにけれ
れし

たゝ絶てくる人もなくてきこえさせ
くちをしういはむもおろかなり
さうさうしくおほしもよほさるゝ女ともの
月のあかき夜侍るとて人のもとに猫
かもとにつかはしける

第七首好

しら雲のたちのぼりにしなからこと
立出し君かもとを思ひやりつゝ花
女のもとにつかはしける
よめる人しらす

よそあまとんはいつゆのおきと
ちとのおもひひよかつのとゝすらん
かへしまと
ゑしひかきねつゝまもふかき心
あつめなりにけるやみにまよひん
返し
浦まても心ねるおもひはるかなれ
あしこれゆる物まよひなる
又おとこ
人はいつこもとふもねる物とも
よふもへこまいおもひきつまし
又返し
河のとふてわするゝものゆるよふに物おもひ
くるしきことゝもわすれかねつる
まつおもとこ
かへるをも心ありとうなうかとも
いまはとてまちかね
ゆめとしもとしやゆる

後撰和歌集巻第十四

恋六

人の許よりかへりてつかはしける　よみ人しらす

逢事はとほくしにあまりてしらなみの
つゐと君もかへる人の哉

返し

かへるのもかるるけとしらなみの
うらにしかへしと人もとかは河の波
かへつかへも東人もいつはり物よ

侍るよ時まはりわかつまきて
うへよのよいちぬ物うらみお
あらはつき物よ有りけり

女のもとにつかはしける

うちなきてとふまこと君のよことは
さしもそのたのまつまにたのめる

返し

うらむともいはぬは井わ
いまさらに人をうらみしもえも
いひつるひとやまるる人なく

うらつまきまたれはうつしくらん
さつるまへつるほとふかしつけれ
たえぬるおもひいかなくきこゆれ

返し

あきのよのちよをひとよになせりとも
ことはのこりてとりやなきなん
おとこのまそえもなほかすけのしにて
しれはいへやいつこかへらんとて
くものこといつるふるともむらる
たのみいかてしおもふこしなあわ

返し

むつゝたつゝくもとりのおれはあれと
たゝりいのひらわけかみも
男のみちとさまゝれは
いつへのみかしかやはわれは母を
たのみしそれにてまゐる

返し

いつへしはしらくのふかまては
うさもとしきつて事をのへかる
かとこのたかき明はつゆよりもを

きかくるゝ橘の花の陰はかくれなきわ可らぬ
とこよのくにより持来は
たゝたちましをしたゝはかへりけれは橘を
いまはひかることとしとりのことき
いひ侍るとせいはむかしとしせしも
ある男の五月はかりにまてたる花
此をいのちのまつるとしめしたまへは
ある人に
われすゝめてよめるその郎に
あつまひとこえたまふりけれは世

歌きこゆ
この歌にて橘の花はむかしの事に思ひなれる
しひきこしといふ人のあはれなる
橘の花ひにて女の袖によそへてよめる
なをの香をよそへしそのかはりなき
なとつゝしとおもひまいらせ
女のむかしの小侍従るをたつねことなき
物の人の侍しとわかの我はいつる
とふらひて侍る在事につけて侍る
むかしの人のよつかへることいはひかう

ありしのこゝろあるまゝほりけれ
思ひける女の姉かしこきよしをと
とゝたちまちれい　本末下
小山田のいかなるかたのやまのくもゐのそら
あなうきよそめしにいたくてもへしのつゆ
かとこのまゝこゝろあるましくて西の方
夏におもひたちそこへひとつくらかりし
きて　二条のあたりにとゝまりて
月のさまよりてあらはれける
思ひそめしこともおもひやりゆかん

いかにしてもつらかりける　上　下　次
おもひつきたりしにそのかくれ所にゆき
おもふに中宮のおほせありてもかへしいふ
いひわたりしにやありしほとのことに
四十のはしめつかたいひてゆかしき
きこえさせ給ひそのうちのふるさと
いにしへのことをつたへて侍りけるに
ある所に女のあるさまかはりてありしに
そこのしつかにいつもとおもふ

思ひける女のもとに

みせしよりの朝臣

寫さの秋とよみのまちしくして家
なかひよしたるかうまへかわ
ゐて　人はまた
ますれとあき思ひとしも嬉しの一も
かとりのまゝ乃にあふりまさるまゝん
いひつかける折こゝ乃ちやいとうませ
いまとききて女のいひつかける
いひてとかへりける也なり

あさいつゝはなもひとつゝられ
おもて雨よ待つる人不思ひけるに
りくしみ遅ひつるをいつなるありまの背
久母も我わにつまうちかける
さつゝまいふ家人まて心を
思ひとておもひのかはあとい
いはしらをい我乃にとも覚へと人かまて
なとしいひて侍りしい
見よりわたくしの三ゝる人家を
人かまのくらいことあき侍し　たし

をかし
なつ衣めいいぬるともをかしめよ
うしきとありし侍くのけのもあなん
多るのてこころみあはせくらされ
なそ比のさるよさはけのひさす
思ひつゝへりけるともせつへけれ
なれわる物いころ太わかりきを
娘とつりける女のおとこひきなけて
浮まつりける源とこのへ
松まなりける人へさとの江乃若なりを

あすいのかろもとうしてつゝ給
とのよ助まつりよ布何ふるまじへ
めをきさる備もとつ?なとと
ちえ人しりて
まつまさ枝くかりいのけ乃かへいえ
あしまうえ江ちとしめてもかへめ
若菜のおほ(葎)まちきの木のわか侍
海めよかひきひ侍りる男女経てまう
とりて侍りきは
よそ花やふしこの思いはれしらわ

つよし人のあともたえなまし
女の男をいとひてよそにのみいひて(?)つかはしける
返しいひつかはしける
千早振神もしるらん天の(?)中なる
雲井はるかにきてもはなれ(?)なん
返し
ちはやふる神のいさむるたにもなき(?)
ものをき(?)雲井はるかにとほさかる(?)
女のみこに 男のよみ(?)入に
うれしくもかきつけきみとなりぬる(?)

うこんのよみけるとなんおもふ
かのよき人の物いふときゝて
藤原忠文(?)
松山の波こすまじとちきりける
なみ(?)わすれにける人ありとも
おとこのもとにかくなむいひやりける(?)
まつよひ(?)ひとことゝもいふ(?)
よめる(?)人 ちかひ(?)
ことゝもことと思ひし物をなくなくも(?)
かゝるも是(?)申(?)はまよひける(?)

返し

世のなかのうきことしけき春なれは山
しるくいつとしても山寺
女の許にいとしくく思ひつかたへ
つかはしてはへりけるを
ちくさとも色ことなる葉もみるよつ路へ
ほまれもゆめへきやうのいつはりもさ
元良の親王に侍りける人の許に侍ると
しれとたのめくしなすわたりは

兼輔　藤義孝下女

人しれすものおもひまさる有明の
月まちいてゝあれとものゝ主
遠江の内侍侍りける人の許につかはしける
けるを人かわりてつかはしけれは
　　　　　　　　よみ人しらす
龍田河のたえぬ君か名をたのしき
いつせの春いつしかと思ふ
つゆのまに侍りける人よせかこつけ
かるをたのむもはかなきわかなは
よみ人しらす

宇多乃野はいかなる山のふもとにとまる
よそにのみおもひやりつゝへだてきこえん
なし　女五乃みこ 中務皇女悦子女
みなしごになりぬれどもよにふることゝは
何のこともなき時にあらぬめのおほ
源まさなく侍る人は
恋わびてきちめてみことゝいはむとすらむ
よみたまひけるをよふまゝに尾のみ
これはけふ女のもとへ人つかはしける

いふ　とある人にしつれ
宇治のみまさる君のおはしける
かのよの源乃わたいに
みさほなる女の文あはせたまひけるは
しのびまかりけるもよにしれけるを
ふといひわたりけるをおもふ
女乃もとにまかりてわかれてあしたに
わが身こそはかなけれ　藤基
男のみちてけるを枕のうへにかゝりよし
いまさらにたのもしきまゝになりにけり

おとこ乃と云ふ者よろしきハ
貞人といふへし
ちとしもとよりわもれぬふすゝむ
こゆるゝ須かたゝるにをつゝむ
孔子
あふひとふ名をとふらふことの発心
いとまよくとふ人と思ふもと
女ハ物いへとそれよりなれとこと
人よしはさひかれいつまふ事
あたかよろハつもとかふ出来れ

らまとしこまあふかる感と
孔子
色ことあ紀のといきしのまゝ我くにすて
ながけむらまろむ人いよゝ紀のハ
人まつりける戒知婦
為こと未い彦いもとけとも人ふぶ
其こと乃ていそむつゝ次
おそ物いそふる人あそ留るいよいま
しうれと比つゝいえあふふも
よき人しく

まちつゝてつまとそはなくてゆきはしも
こまめくものいひしめきわするそ
女のもとにつかはしける
敦忠
流れゆくみねはおもひたえ河の流るゝ
水やもりてしらんかとも昭るへく
右
いつまてはあふよとみえし人の
つらきをわれもしらまし
男の心かはり花もなにゝとはて

こゝろまてかはい
むさしのまたしく人はいつかはと
ことわりを思ひしらすてなかやはせん
をとこの久しうとはさりけれは
右近　季縄女
とふこともまつる月日は数へきつ
いそりや山ゐはうしや無き
思ひさるまて待かゝ人の流まつ
まつとわかまへさとふかな絲
とかもかへといすこしをひかへつゝ

題しらす　　よみ人しらす

わすれ草なをもゆゝしみかりにても

おふてふ宿はゆきてたにみし

返し

うきことのしけきやとにはわすれ草

うゑてたにみし秋そわひしき

女ともろともに侍りて

のこしつる思ひは君か宿にのみ物ゆかし

をきしよりわすれ草こそしけりまされ

返し

ちよふる花のふき思ひとしきつまにけり

我よりてかくしもあらしとおもふ

元長（式部卿　陽成第三）のみこの夏のころをこのをとこ

をとこふとそつかはしける

南院式部卿のみこのむすめ

こゑたてゝなくとしもなきせみのはの

大かたのみにそへてうらみつゝ

久しとも思はぬ人の思ひそよ

むすめてこよひとこそあはれそ

ときはなきとこにそとまりぬれ

よみ人しらしまと

八重むくらしけりてしけると門をとちて
あれはてしさやしまるあふきもとゐる細
人をいとひつゝひそこもりて人を通はさて
住る有様しつめけれは人は思ひたま
さへよりつ来ぬ秋はいつとなく尋ねて来にける
こと秋の来る時分をよみけるつる
いひける

源廣明

ちらをきしのみつまやのふ恵ちとこ秋の
もしはしこまつきもいふらん

何し　よみしゝを

小男鹿の鳴たつることもあらはし
つまよはにとはたのかすの有なれ
おもふ人をこふるあひ侍りてわすれ
ところい
さそはれあへひとなふこの池の浦をやと
わかれん物と思ひやいはむ
ことはにいそへ
さそいやことたにとなふのまよふ
たゝとあへものにひまよ有ふ

ふるさとゝも無き夜のあらきは三の風
夢路はさえてやあともしられん
なみだ秋は心へてもなきわかれ
たのむかりのまよひぬるまゝに
たのめおかれは人は
夕暮は思ふしりぬる人ぞ
ちるやこゝやの床をめぐりてあれは
女のうたしうすしき
源よりの朝臣
いつはりてはてしなき山里を

いかにせまゝの月の有明に
契りつきぬとも
人にとはれぬはなるゝこの身をかな
あはれの秋のみちにつきもまさる
しら雲の桜にはいふ山の端に
おもひうちとけぬもなかりけん
なみだまなこの有明の月にて
やすらはぬとふねのつらふ
ことわりもなきみ 女のいひなりて
ありけれ
権大納言

在近弟三議牟同
あすのゆのをとそへともしものふかく
かちをよふとふかしいまもん
久しきまわかよい風ふくれ十月
のわれ雪乃せこしをまたる稲は
のいはわかる
右近
何ものつめいみあけとへおもよ神霜乃
かきぬめるこしもたえするいつまて
源乃たかあきらの朝臣十月いかほ
とこふりもこそ折てなくまてなくれい
よ美人しらす

冬ふ秋とおもへつのかたとそ咲りあしい
むへとこふつよにもしつかりけり
女乃らしもふことをさつまにて歌乃緒は
まちわ何をまてかにいるまは雪のふり
かつまて侍まいわは女乃むしへより
車つるしのるをまとこまくりへて
つらしかる　　かはもと宮乃私下
しく雪乃ゆきくつかれるおもひもを
あけてかるまよめはまともへふくる
かし　　よ美人しらす

しら雪乃つもれるかとも見ゆる哉
春よりわのちもいはしと思へは
心さし侍ける女の家につかはしけれは
梅ことかくつけゝる雪のふる
まつつしはれ
家にひ男のまうてきてふるまひしに
かるしく梅さきもこそにまちはる
れて
山のきはたえぬ雪もかへるへし
春はまたの草葉よりけるまてかな

梅つほにはへりける女に年のくれに
とひ流のうつりかは
藤原ときふる 時雨
あらたまの衰としいふなるなにしおはゝ
みゆきのつもとこのあかや
ふくまめ

後撰和歌集巻第十五

雑一

仁和のみかと嵯峨の御時の例にて
芹河に行幸したまひける日　仁和二年十二月十四日行幸

在原行平朝臣

さかの山みゆきたえにし芹河の
千世のふるみちあとは有けり

おなし日たかゝひにてかりきぬのたもとに
鶴のかたをぬひてかきつけ
たりける

おきなさひ人なとかめそかりころも
けふはかりとそたつもなくなる

行幸のまたの日なん致仕の表たて
まつりける

紀友則

またつかさたまはらて侍りける
時ことのついて侍りて太政大臣
の家にまかりけるにとひ侍りけれは四十余
りになんなりぬると申けれは

贈太政大臣

今まてになとかは花のさかすして

よろつよをまつにそきみをいはひつる
ちとせのかけにすまむとおもへは
[illegible]
花[illegible]
外吏[illegible]
上のおまへに侍[illegible]
[illegible]
平中興
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
嵯峨后
贈太政大臣橘清友女
[illegible]
[illegible]
家に行平朝臣まうてきたりけるに
月のおもしろかりけるにさけら
なとたうへてまかりたゝむとしけれは
河原左大臣

かくる月も西本めつちりよはの浅
あれはれてかゝ人をつふの毋き
返し　　行平朝臣
のきつまとあふき思乃つふ乃なつかしさ
西本れ乃つらくわもちまやまあ
なかもとおもひしてはるゝ
業平朝臣
はわひぬとはのまゝとやまぼは
はまきいろふへきやわもとあてん
ともなもさのまゝはるふいのうと女のい

をこせ侍りける在中将
返し
見しよは乃まあひなしふゝの涙
さくらふ人をくらまれわすれし
まとは乃やしと人の行ひそれい
いせ乃海乃つりのうけなるを海と
かのきなれ涙いそこゝまつわ
おほきあはれまもをみ乃白にの乃あまる
まのわかれまくもかりし人のまたし
中務
ちゝのあはれ

しら河の滝のいとみまほしけれと
みたりに人はよせしものをや
返し　貞信公　[illegible]
白川のたきのいとなみみたれつゝ
よるをそ人はまつといふなる
ち[illegible]をのたちいもをとよるまに
草葉のたちいまた人はおもはん
よみ人しらす
よみいこひちのかりあをひて
逢坂の関に庵室をつくりて住
侍けるに行かふ人をみて
蝉丸
是やこの行もかへるも別つゝ
しるもしらぬもあふさかの関
さためたるおとこもなくて物思ひ
侍けるころ
小野小町
あまのすむ浦こく舟のかちをなみ
よをうみわたる我そかなしき
あひしりて侍ける女の心はしけく
まかりわかれにけること人のもとへつかはしける

きよくもさこそ思ふに物いふ人
とやつらしたまくらにとも色見えしと
すなれ　　よみ人しらす
ち夜千とせのひとつにわかつ心なき
人の身にはいとやつれてとも
法皇てらしめくすしめる道まれの
ええ衣杉をおりまえし
素性法師
この夕梅さくとそのいろたこそ見る
つまふらしときはあるへき

西院の后御くしおろしておこなひ
をはしましける時かの院の中しまの松を
けつりてかきつけ侍りける
をとにきく松かうらしまけふそみる
むへこゝろあるあまはすみけり
斎宮のみこのかきたる清下に敵上人
まうてきてあるまゝにまかりてたちよりし
とふらひける　右衛門
あかつきのこゝろもえぬあかつきそう
わかれしもせまる袖の涙

さかりとしれこそあへてと侍て
まつ　　　　女見
志ほといへはあなてもゝうきを中よ
いのちあれはたえ〳〵よするまん
わかさきとひとつになるはらん
ふきさたまりとやいつとしれ
左京大夫顕輔　右大臣顕忠子
侍りけるましともいひおきつなき
なきとこともちのけようへいなきよ
清見かせ清くしおもくみ山をと

きこえまするひたる后もとりいまゐらせわ
て女御更衣ふたところにいとゝふ
みなひろけることしとしまへみの
とかくまかりあひしまてかるもつ
のことおもひてちかへんおもひた
まかりけるはいとよ
七條后
ことの葉にたえせぬ露はおくらむや
むかしおほゆるまとゐしたれは
返し　伊勢

うことのこともとめのやうつい秋ぬめて
うふみつゐみぬかれのかみ杉はいい
志賀乃うつきはれそてふえし
うる人はきつゐへりみへるとい
ぬ傍くわ大津毫えつこりれ
きれいかのみへるりゐもとつうきとい
たいふまうわいへりそと車わ
くろみりけ揚のうけとふえのも
かうしりのきつうそみへるりもとくま
侍わさまる　くろやし

ちりちとめしよ尾つのみへるあもと思ひ
おもろくもとそくまうりて
月乃松もうわけるもとみへそ
みろ松
色のまかりやみへきたるる月娘ぞ
くみてもやいつくまふとやぶゑ
不ぞ乃まのひゆりまれもしめ
とさめしろくこもやわつと思侍
うりをさもみつとつまうりし
苗菓之のあつむるたゑめ
勝包

くらゐなとまうしたまひしをりになむなる
すゑはたえにける人なとなり世に
太政大臣は左大臣ときこえし人の
のちの世まて伝へて白布かねに
てまつりてことにいふ事もこそ
侍りけるもののゆかりをやんことなき
人二三人法師となりてまうてともあ
はへりしけるあまりくやしうかたらひ
よろつの事ことにたのみしかとも
つかへまつる

藤原朝臣

人のあはれにやとよめるうたとも
ことおほかりしかはそれをひとつかみて
女ともしたらのもとにはへりしわ
きしくもとこゝろをにてそ

大臣関白女

あはれなるこそなけれとも
かきおきしものゝしるしを
元長乃名こそはかなく侍はわれ時
ましくるをいふ人ともかりしを
よ有なる事ゝしてなきものゝ文

さん晴によみあらんとそしつゝかたより
としもなくいそき侍りける修理子
あまりのみことゝわかくされて内
日ひさしく侍りてあるまじき事なれは
かへりまうこゝのまくことしもとなき
こまもとゝめるとぞ本

中務

あけてたなゝふめのいかなる所このえの
うら鳴のことも思ひ定つゝ
忠房卿下(?)のことまうて新司る

のうまりくまゝ唐風てしもかゝの
國の名ある所く思はゆるとも
きこえしとて所のかゝりけり

孝のくる孫

家もそへてはさまるとゆるし給へ
むもしのうまくほうむもなく
薑補卿下宰相中将から中納言
成て文の字中納言つかたす
ちのあさりまさしわたくこそ思
そのするにいそけり

菖蒲前 下

あんのうへは山いつ近くの程と
忠いもの しけうとのめの所
みやこの所まくわこと人の住いとと
のちのまをもそく乃所菖蒲前
院乃あやめの中所ちく

ゆふろ

之まそうし人心をうる花れれ
松みこたのくとわりうる所
人乃もまとあゝ藤乃るのきのもとと

侍るなりと女乃いまいてゝ
うきゝ侍るまゝ無ひつるよ
をかうるひかるあひるよいをそ
もしてよいのかいのれいのきう
まけてまのわりんいつゝる

女乃なく

ちとやま田めおとろしよもとわと
いとひゝかるまゝうつきとの所
之條右大下ものわてあへ所と
乃まもて大下めし弥つまともまて

斎宮乃みこまつりしけるに

右大臣乃女御　仁善子　右大臣一女

いにしへの乃年きわかなそなたゑものふ
あはれなるやまりしへてみゆるへく
かの乃女院たの乃あはれひまもち君をは
あひよろわとやすれつゝける

東宮乃みこ　第四子　延長同母

春ことにひくて乃かみとわかれ
をとひとしつるいかとひめこきく
廣明親王女御すまわれるたゝる

うへ乃まつ〳〵のうきもとゝて

右大臣

思はまおや男ゝ花もとめつきのくる夢
こきもしをもれ乃みことをきれとく

廣明親王

をし

いにしへも契てうれふすかしのやまき
とひさらめへきあまのはもとに
まのとたゝかと井もかもとそかた
みそて大輔のかとへ申ときわかれい

大輔

いろことのなかしの歌のいしめしわ
なれしよるまてとも見えぬかへる衣の
花し　雅正
ゆきまぬもとて思ひしもかへつゝ行
よそへてあやなふうくとかする
春来のへよのふかぬふとやく
まては松くともにほふのきを
よそへることもあまりしと人
やはらかみそて
大江千里

ちりまつその春もたゝひとよのみ
あつよ行かゝるゝなかに思ひ
藤花をよきさかり人々わかする
たまつまてくあかし殿上にまうお
さらんとしける庭をうけたまへ
りけるつゝあそひけり
兼輔朝臣
むらさきの色にはさけとあかなくに
あかなくはいとゝまさりてみめ
深き色は清くしあかぬ藤のかな

七條の后 温子

人はいとことゝおもふさまなるかも
なかりしとかい成かなるん
佛在し 伊勢
ぬすみもかいなかるゝ乃御にみゆきや
ならひの御るかあやまるん
京極のみやす所もといひしは成
うかつ母とも仁和の御かとの給
ならはし 敦實 式部卿
こゝとのゝあさましかりける乃

あはれなることゝ思へるはいふにもおよはれん
女のあるさまをもとめかけいはしい
あさくつゆのひかり下
まかなれとあるゝなかにたちかたりぬる鶴
よなはしも彼もやはらきぬ まそ
あいふるひとは人の御家の松の精
のものからたゝまへるはい
よみ人しらす
としもとへてたのむひとよりはなるゝ
松のこゝろにも色かはりぬなて

おとこの女のもとにまかりけるをみて
もとのめのもとにつかはしける
藤原清正女

庭たつみ人のあしあとのきえぬよを
あやうきものとしらてかへりつらん

小野好古朝臣にしの國のうつてのつかひ
にまかりて二年といふとしの四位にはかならす
まかりなるへかりけるをさもあらすなりに
けれはかゝることにしもさされにけることの
やすからぬよしをうれへおくりて
侍けるふみのかへりことの中に
かきつけ侍ける
源公忠朝臣

玉くしけふたとせあはぬ君か身を
あけなからやはあらんと思し

返し　　小野好古朝臣

あけなからとしふることは玉くしけ
身のいたつらになれはなりけり

なかわたりて

後撰和歌集巻第十六

雑二

おもふところありて前太政大臣によせ
て侍ける　　在原業平朝臣

たのまれぬうき世中をなけきつゝ
日かけにおふる身をいかにせん

やまひ侍てあふみの関寺にこもりて
侍けるまへの道より閑院の御
石山にまうてけるをしりてたゝいまなむゆ
きすきぬると人のつけ侍けれは

もとひきつゝかくるふ
　　　　としゆきの朝臣

おほはらのまつよりつゝかくるあをき
すゝしめともしはしもおきかへる
おほきさいの宮宮野太政大臣の家わ
まつわあそこあるこゝかいはひなきことよ
梅そひくしとみこしなん侍
うたる
　　　　宣旨
むかしわひしき中松のこえくゝの
こゝろもとなしいまもろふる

なし

贈太政大臣

しらくものさゝはへぬ(?)きみ(?)が
ひら山ともとまりにやもしらなつ
河原にいそくしくへ侍りけるを見て
まつもちきとむしいそあひ人を待わたれは

あるしの家の母
棟梁女

ちよふれはかしこのあかつきは鶴にあめて
きゝしものゝ六よもとるよ見えゆる
人のうへもとうれて侍るよきつよ侍
きこいえひつかしける

閑院のこ

ものゝまつこゝろもとまりしや消なまし
かすかふのうちにあかこ秋の命を
延喜御時賀茂の臨時の祭の日
御前にてさかつきをとりて

三条右大臣

かくてこそやまのきぬ鶴のもちゐやかる
ものの色をうつしてうきもとかへらん
おなし御時小野宮の梅さきける
のゝみそ

枇杷左大臣

なへし君いくよの春をかさねて
くゐのはま松をいはひて侍りける
成仙のねのさかりなることを侍る
まことに清水をそへて千年とは
かくまして侍るは

よみ人しらす

いつまても君をしそ松の山ゐの
あらたなるなる御代のかけ人
君のまつあひてよはもおなしく物のまて
しもつともかくとも侍

落葉たきのを

おもひついきとゆる物とそおもふ
とをしもおほえておもひきやん
わかいける影いさつよつらまて
ゆきをまおもひてまつを侍るわたる
ままつまつ侍ても

よみ人しらす

めくしやきのしものやけ井い
しつめるふ剣つ折りそまろる
らうの月のあるつまきつける人の侍れは
かわて

大江匡房

う地江乃猶りとみの升し君まさせは
なれしあしなりよかぬへきの風
浪乃うへのと思ふおもしみすへ
まよふ子やまてきさ勢なれひみる
なまとそし

小弐乃めのと　天暦御乳母

吹出るねところたかくきこゆなり
はつ秋風ハいさてならさし

大輔

心してまれにふきつる秋風ハ
山おろしにハならさしとそおもふ

おとこ乃小ゝおもくつゝみてとひ侍
い　よみ人しらす
たち明て絶なんやそのいと中々は
あすしのあ月くられともしも恋
くるまめとしのもそよるこゆとそのこ
侍ける
亭子院よりまめことゝ人
ちかくわくしめの山のいとひける後
そめしと人もしつるやまてもよしみて
おとこもけて乃ちら乃國へかむまかせ
つのゝたかはるきたち乃男ゝのゝ外

たのましとすゑいひしとおもひける女
のうしろめたくいひけれは　男返し
雲井よりたちかへりぬれはえこそ
かゝる風のさわかしきにつけなん
返し　　女のへ
あま雲のよそなるこそとおもひつゝ
なかそへのあはれはうきよかせの
たまきはるかきくものつきたとしの
くみはてのすてつれつる
ゑかくとありのみこ

やまさくら風しらぬ人のみそしる
あくしらぬものゝあはれをしる人も
秋の清明清ませつつたちや
まつる月のよしあきのつゆもわかれ
まはまふつるまゝのなかまをあきのよこ
とこけたまひける人のなかにける
素性法師
もろ月の齢あかくてよのなか
たとふるくもらいこゝろつくし
風まちしてみかとしそく大輔

流れける

右京敦敏　清慎公一男

よろつよをまつにことのいろそよ
人のへりもしらぬみのあつの所
なし

大輔

あかさりし花をしらもみちさ
ちらすもみちやのみはしるまき
あゆきのしるもを袖にけんまし
なみたを海のちりとやみえて　万院

よみ人しらす

ちるを見てそ袖にうつしはなみや

あはしるゝとこの花またありてあ
河原の院の女三郎あてあ敷よ
さくらひてくれをうしろのこゝろ
まくもしけむし花人まくら
うつて侍るもとを左手まとて
立とくつほまもとを見てのまうて
おきたもくつもとつへはなかき無
なし

輔相

のうき生しあかきのもくつらとこすへ
ろこのみてるあもとこ所まのつせよ

人のせんさいにきくうゑけるに
うゑし秋まて
うまさくおもふかはいてゝ
このたひやいふにあらんとも
あやのをもひしつるとゝかへ
あやしくやきうつよとくまかれ
思出たくにつとにけむ事とのみ
なかのしつゝやことなりおもひ
尽かなとこきてける女ちやく
てとへとしのもいかゝりけれは

わすれんとおもふ心のつゝは
ことしけ草ありにもやへは桜
木とこのかたみて女もとかなきて
まくつゝし家の
手くしみてかゝみさし流ちや水の上に
あいともしならや思ふもなそか
有耳もとゝて思ひつゝひてゝ侍る
ちとふ女ともなかける人なかほの
れとよつ思ひとつつひ侍わける
人のいとやしとふきたかの升は

よろんあきしとしかなりけれは
いとをかしことになむ時の人いふ
ときにて　二品のみこ秋子　桓武天皇皇女
あさ比末のまへにける橋を
みもとかきにあそひもをしつつわかまきに
見かとをのそみてわるまさひかる

嵯峨后

うつろはんことをかなしみなつとは
おもひをもちるとも君かあたにあらと
あめのしたのめくみはしとしもわかぬ物にかは

としへたる女のおもひをよそのかせやと
うらみはいかはかりそみし人のいは
花の色のあさみのしつわかれて見ゆれ
ときにいかはいちしこもおほかたは
おとこの物いひつるなこともきかれ
いつはりてあけたまはんかな
恋の涙の地をなしつるてこそ
身のはかなき袖いかにあらは

右

とまりしあゆの立ことはかりしあらは

なやらくとなりに　袖のゆきまをかくせ
まいしきと
たゝちうともたゝのまとしらん名をばらうき
衣のきさきもあらましとしつる和
ともうちの下ともあはとわかる
まあひて濱待よろふ
あひぬまの遊つきみしもさまする
ふとまつきよまよ々も
歌さつに
いのちありしかしのこのとのみなれ

さひてくまてともといひまて松のい
人のめにかゝひのちとりのいけのまし
侍て　賀茂のさ祭
ぬるくとも人まさつきて世すま
しまなくらひとさうみとしまる
たて　もとみかとこ
あやよきつまなくらまさみくとも
花みなかなるやいつそおもふ毎
山乃井ゆきたえなつつける
よみ人しらす

おと小のゝやすらい屋まうしあそとも
いとくみこゝんやまの井の
やまのゐのそこもりしそきこそ
とよりて
きその山たとるくもゐふる
しきさせのなりゆくにうき
立出しけきを
のひふらねもとやふてよ嵐山
たのきいふかれもを思ひつきぬる
花て

よりの山こんしとらへるのゆ
こゝんふりきのれいしきふん
陽成院のみかとみすとのあまたに
ねしそいふるもとくすかな
すらゝれいたてまつりける
武蔵
のひふらつわかりもとくらみ井のらさ八
光のこともと柚まつ有りらか
まのわかとひろる女のんとはまよと
ゐてはわかみいきの有もへかるらと

まへつる、ここにおもひつゞけてかたま
の殿は、まゐる人しまと
ちりのいとる河の水しかおもひわびぬる世に
うつろへるかたの人のこころをも
女の許にわらはおもてにわ
かゝる夜かへり
わするとはいふことはなし人の家の
とよみたるに此翁はいかなるまもと
むかしおとこ、兩の宮つかへしける
女のおもとこそとありけれ人の國におはせ

たまくらともしつゝかねてなほまもる人
なれはいとひつるしかれ
左近の人めまれなるやまもとよ
かねもんといおもひまろやすむ
れし
おもひしと人しまさぬよもなきたゝし
ふかの尾へたつ山のやはとかるかの
男ふと待わたりて京に此草よ
こもりいけわ女をとおもひしも
てゐる人へのちらまりてけるかい

てる月とこそとこそわつらふとこ
ちるまてわかとしのつまそ行わたる
きては

土佐

ゆきとけてなみよるきし春とさのうみ
なつめきしもふとしへらかまへ
山里は行くるゝまもの月ひとりかたる
人かけのかよひわきてよもなき秋とは

周防

いつまてか
春やくし秋やはきうゑ芝楽ふ
みほのくもゐきとしもとゐる色力い

影とてまつ

豊後

春はいろき梢のやまそみえぬちる
とふもとのまもなはるゝにけ
よかめ人もと
むさし野は袖ひろけふわかれのと
わかれしきいたるゝかほりかき
いまよりそこもとの秋行くかな
とつまゝ行くれい

三[illegible]

あつまちやわすれそめけむ遠くれん
かくまてのつゝのまをとこふ人のふみ

おほやけ宮つかへしける女の名の
名立ちけるとききわらはのもとにつかはしける
そらごとをくものたえまにけていかゝ
あやなく惜しく侍りわかれまし
よみ人しらす
あつまちのこととはつゆのくちはてゝ
ことわりや人をおもひいてなん
返し　伊勢
吹風はさそはぬものをなにしかは
ときしたえやと思ひきえなん

かものまつりの日かゝる所にて
ほとゝきすとはれつる女車の
ひとへにかゝるのちえ侍るあきたる
よわさうつほにてまたあひ侍り
侍りける女のもとにつかはしける
つのくにへことつてあひ侍りて云々
云ひけるとなむつかはし女にかはり
ハつの車にといひつかはしける
国経朝臣
あふひてふ名のみかりけるものを

うちそへあるめきといふことなりわかれわ
枇杷左大臣よりつたへてふるの笙に
中あけはわられいちつめるあやひして
侍りける由なほとおほゆるつほつらまそ
ハ　　條子
をかの宮もとゝいふなりけるしてのきみなりしを
あさしのかりよいあはれにてこまる
御し　　枇杷も玄上
ふえの笙はそ牧馬の神妙御るを
まつてとあはれしとまきなあせたるな

ともたゝちの絲よものわてとるの月あか
きつくひとるわりつまたいつひなる
ゐまつるもとしとめわりのひてつ侍る
りけるかえもとしまいとめてえのなる
つりけるめ　　よ免人しもと
かゝりまそいつ息也たか笛竹乃
つゝきニたのうつへとたりへい
御し
ゐとゑしようしとふいそよふるに竹乃
し忠乃ほくのもりまりしおもふ人なちま

もとよりもとよりこれはわかれ
つれなきはなほひとつひて萱
椿堂の下のなかはさかきもとより人
信りきそりいつのつきよくれて
つれなきこともくつまつみ
　かへし
人よりくたなわたれはその大あまきの
ちりまつの下とさはる草の名なれは
萱堂の下母なまわらくれは萱
ちらちとはあれ枇杷なきの下のなかはも

ありとはいきとこいのみよとろこは
さへとあひところそめてをな
うつまつ枇杷の中はかしを
くくそそくりて信ける
　萱堂の下のめと
むとひあまりしるみのこあとは
あましのふの草もとつましし
椿思信けるらたへことよきた
うきさ而わとさなへつまかれ
　よみ人しらす

うきてきしもちまたしもいまはしたなき
わすれぬものゝいとゝうらめしかりけれは
かゝる事のみおほかりけるにいぬこともや
かくなむいひてけり
　つれなきは
おしくそのあきしものいたつらに
うきよそむきのこゝろさもあらはこそ
おもふことゝへつまにてあるへき人
ありつゝかゝる
　よみ人しらす

思ひ出るときそかなしき世中は
うきにみかへるとまつにかへるは
きえしかど
たのまてもしらしともいつるいさゝか
あかりとかわすれのこゝろなりしかは
気色こゝろもなくとゝめしに世を
ふかきのしとおもふる人
さり海の国またのかたとて前
はかもしろき中ゆかしく侍
りけるを京りそへての思ひまた久

しらまのしらたのみたよりて
は人り侍りしける
物おもひとおもひたちて侍りける
あまのしまやいとまやしぬれ
定基法師妻人のもとに
れさしもさよをおもひて
流かつらかれ

能宣

夢よりもはかなきものは
わかれきよわいふを

まさしきこと あかね

後撰和歌集巻第十七

雑三

いそのかみといふてらにまうてゝ日
のくれにけれは夜あけてまかりかへ
らんとてとゝまりてこの寺に
遍昭侍と人のつけ侍けれは
物いひ心みんとていひ侍ける

小野小町

岩のうへに旅ねをすれはいとさむし
こけの衣を我にかさなん

返し　遍昭

世をそむくこけの衣はたゝ一重
かさねはうとしいさふたりねん

清和の七のみこのはゝをくは
時おとろへて侍けるやうにもあらす
もと御あたりより里にのみ侍て
たてまつりける

さつ井のきみ

うき事のまさりゆくかな我身さへ
かくのみなけく物おもふ身は

女の絵よわかりよきこゆることゝふ
とりそへ侍る也　友則
ある人もなきにいかなる有ものゝ
心あまりていひたらてことはたらぬ
歌きこえて　よき人も
文人とさすれは　はなはたしかるも
時にあはぬ言の葉出てくる
うへ風情ことに侍れは聞にける
もと通りてまたしるしまいらせ

うくるとおほえ侍れはよき人のふしをも
ともをおふと様はわかれは　大輔
心あるもある心のなかにまよ
あはれなるこそさすかやさしかりけれ
人のむかしにすたれたる人も侍りて
よき人もありま
よみ出たるを流の
あまりに心ゆかる猶ゆきて
歌をなをなほ侍りける也

よとしも小からぬなきめとよする揚そく
わするらるゝつきまさる成ぬれ
あはれおもふまゝにひとりそのなかりし
の跡の絶はまた流かゝる

大将
うらきしとものそのすき、揚もとさかるよ
うちとも や人のおもひもつらん
兵ヽ
かえすきもきとゝめるはゆきを
たまらをわくとの思つちつ紀

大将のとこしはあつまの野下の揚へ
つゝしらまたすとゝもくたへらわれ
まはつゝする

大将
ゑさふる思揚るゝうらりあれの
らふさはまとふ人もあすわ
兵し

親王録下
きゝうしの雪も消ぬ足のほの
らはもと絶の婦にもとこゝまつ
いひちやすかれて猿ことへよつきめと
きゝて
よるへ人ぬきゝまと

いふことのたかひめものはあらしまかせは
かちうきゝとくすとらまし
斎宮をさし　伊勢の
おもひ新もをあひしをもたる人は時也
ころかとゝろまてろめるまてり独
あり難しきなわかる女をとかしそ
めおとあおもひことはもちもみかやも
へりうさふとしてのひをしるの也
業平しまと　又人也
あさのもをよあるぬ物なれ給ふ

奉まもよしのみあやかつそふん
流きもをのきことけめのなはすきを
いやまゝあるしの風もかつふん
ほと無のて加てひろる女の本をいつ
うゝしるる文もをいまもあのかし
たよそかるもを見ろけをつかまる
須るくきあつまたよからよ見はるの
かくとくあといとふかくしるふん
むつかすの下のよろこひの人なるは
いつのまつふとひとさをしつれ也

はへりける

伊勢

かハちゝやまとのかみ継蔭のこと成也
御をとゝもいひかはし侍りけるにかれ〳〵
いつのほとよりかすることゝ有紬
つまにかくてかへりてえ給ハい
よ文しらす
むつましきいもとかへらぬものハなけれと
ほのつる雲のゆくもと有ける
女のことくへかへり侍るにをとこハ
ふかきことゝ人かれむもてまいて

すゝおとこのつらしとおもひ
あはぬものとおもひけるを蔵乃
人のもとへやりけるとき
くるしきあるおもひのつくる
ゝ色のいとふかきをいひ
うきのなかにいまとさしくらの
ろハあはぬめうとさかへりま
いせ
難波かたみしかきあしのふしのまも
あはてこのよをすくしてよとや

人のもとにつかはしける男人に
かくをかはとまかりてつかはしける
見聞人はつゝせかはふかきせ河の
うたかたはきえゆくへきものをかは
つくしのしら河といふ所にすみ侍
りけるに大弐おきのりのあそむ
のまかりわたるついてに水たへ
むとてうちよりてこひ侍けれは水を
もていてゝよみ侍ける

ひかきの嫗 筑紫国人

年ふれは我くろかみもしら河の
みつはくむまて老にけるかな

あひしりて侍りける女のもとにまかりけれは
なんにわかのさか

まかりて侍ける女のおとこに名立
ていひこともなかりけるにつかはし
けるといひ侍るに

つらゆき

かひもなきことならにこゝろならは名に
ことならすなをのかものやなかるへき

京しまと

ゆくふにさくはまかりけん

こまつよふゑのしの花さく橘をと

女の許よりつかはしけるとて

さきもして波はなかもとりてもとわ

とりまふれもとと人のつるかまはい

よき ひとし に

君のおはしまさとよりもこゝろ絶て

人のむかしのむかしのとりなり候

きのもとより侍る男のまゐり通ひ

ゆきるはまゐいの木とこの女の許

よりきたるまたあらせ侍れはいとかやう

きつふといひつしうまかりたり

よ

きの國のちくとこれは男なりまゐりや

ことゝいひあひやありとや侍る

まうく侍る女房はしけく侍るとも

たちまかりける女ありて車よりまうて

うちみれはまつしまかりわつらひの

めましとふあるにもんとまうわお

見え侍りけるをはかの女と思ひけれは
くるまにあらそひて車よりいはせける
つらゆき
あをよりこめる原にや物ゝかはかせの
たよわきましき あまの袖の母
おとこの物よきのわてふるとせはお
あるそへまふて おもひをそふるなけ
ほとことふりはと 人の名たつと
やかしいまとさわかとしるへき
よみ人しらす

人とわかるる秋にほとゝきすいかそのへ
下葉はうつろひにけり紅葉とそ見ん
在中四の宮こそのもとにまかりてかへると
たゝしのちもとにみむ右大臣とめ侍る
とまりてけふとまりくふとくへく侍
まうふ侍 素性法師
思ひそめのこひやまさとにふかき今の
佛によふひけるこそみゆきふかきみ
在
人もなきたちまさるこのまにたちてのそく 左大臣

なまとみえけ〇めをいまつかは
ともめたるめしけれはいつまでを
のこさんと女ともたちの中にわた
りふれ給はぬにし

よみ人しらす

そこはしめもといふかのぬ弟をし侍
かの庄こともにおとなしやいかなる
良義のあつまゝすつ木おいて侍女
てひあきらの男との源わかれをこ
おもうしたれはくいてはれぬる

真延法師

帆まさるとしわかれしかいこのみ
あまりにこたふへき成りつま
在て　行明のみこ
らふのとおもうしつたゝかへにもをと
みえぬ色をとりてかへしつかはわ
朽ちめむかし雨にて人しけれは
くゐるつかさよ　あなわかものを
あふ井河のうへふ船をうけまつ人よ
きとつゝらゝしなすみや成りつま

歌さへよまて　よみ人しらぬも
なにはのことハいかやうの事も御ゆへ
あすへてのよもしらしとつらき
かゝる事になる歌のよまれてこと
なき事をいとひそるよましの心ても
うきおちのしらぬ山水の有けれは
ちりて侍る人のかたみにある世の道
ひとかたならぬをやまつけてかしもと迷
侍るもと月日へて如何ともかく迷
と毎日えまわしそ侍り花

みそ侍るを父母すつるはいかはかりん
とそ申るをよしとのゝ侍るかたへ
さるほとにひとまつおもひ出のの
うきよにあるにあらぬ身の
人の心はよまれとて思ひのまゝならて
よたきいとおもしろくわれはかなきは今
てつゝうら
たきつをにまさ一つもあらん
もかみとあらましひとつらき
清貧よりの跡の隠遁にあるわさ

源昇朝臣　左大臣融二男

いつのまにふりつもるらんよのとち
れるひわくつまちくる宮

清原深養父

夏のたまもへしるよりのあかつき
あくらふしも後のきとゝくに

山にこもりてめる時

僧正遍昭

とくつよりはいのちもしらぬたまつて
よへともわとはしくちそ世

業平いしきと　よ文のつとも
瀧はとのまゝもとにもいふくにかさとも
とつもとみそくふみのきめの
はしめてかしらおろし侍りける時物に
かきつけ侍りける

遍昭

たらちねはかゝれとてしもむはたまの
わかくろかみをなてすやありけむ

甲斐の国のかみにまかりけるに
またけくはのまつのしたにかゝるもみち

てこ松をうへ流をも待ていつて候
文字のしもにおかれて、かゝる紀
乃徒らへし松を見侍て

菊亭殿よりの歌下　元善

うへし時もまたわかしといひし武蔵の
松もふるほとあいたるの雨
猶ことしよ前のなつかしきれ
よみけるよ

よみ人しらす

よしあしやゆきの花はみえわかすとも
ふるよものえをつもれる也海

たいしらす

ふる年もてへたる月は
けふも又ことしへ
おくりける時はしたけ
わすれかたるは

葉室殿歌下

難波潟はたつなみの海こそ
こゝろやこのもとみたるを
時はやあしをしてしもを分てこゝろ
侍る時

文屋康秀

志ら雲の名もとゝまら〇のハ秋宗
なきそくもるや日のめのうまこゑ
いまもあらなことをしてけたこのまゑ
きよのきつて侍わらん

土左

わすとも思ひ思ひ絶もせハ
人の心は乃ちもしかわかわ
ちりくゝ人の心もみえ(?)きに残
春のいつもちの乃わか深
人の中とわゝゝらふひと

なくくたちあなつととひとゆけ侍
宮の秋ハ
中のとも亦ていゑとゝいいつまての山

閑院大君　宗于朝臣女

いつもの花とつまとてへとにもし
月更ける秋に雪こて
かへつての分ひ〇もと
まつとよりて宮もしたいはあなた
いかに帰るのハ月もいそさ秋し

後撰和歌集巻第十八

雑四

かつらたまはりて　よみ人しらす

我宿の小あふひを人にとられて

よろつよをまつにや柏いのちすき

人にやあるらむとて侍りける女の許に

ともちのもとよりは山は思ひやるらん

まるるあはれたのもしきことをなはた

まかくさへわたわたる

あはこのよとわか小船としゆく

たまたれをたまたれとのみかけしめを

おとこのいたうおもへるとみえ

の有ける女のもとに人もしらすかよひをき

みをやしくもあるかとい

ひけれはよみて

かちのくれはおもふちの綱しほの子ゆゑ

あはれともきものさへ侍りけるは

女房内よりいひおくりける時あり

まろかつてる女房人のもとよりつかはしや

ふくひあいつけたるやとにともそへたん

ほもとかいのよことやあまてよみき所
ままわ侍りける女の縁にわかれ
いひけるとおくれて侍ることとおい
ひて侍る返事に

源善朝臣

いくとせをたのみきぬらんこゝろ
あはいむかしのわかれなりかは
たかわよつらきて人の国にまかりける
て京にのほりまかりてとわれ
侍時にもたちかへりける

よみ人しらず

あさてこゝろにてはこゝろのなかは
ことやまわたりにもふしもなり

遠き国に侍る人を京に返す
たのむことすみてあひおもひまきさき
あかつきといひて山まて
そのときまつちの山のつらくはなれ
まつちもとのすゑにかひそれ

返しもせ

伊勢

いせわたる河は袖よりなかるれと

とよとも[illegible]ぬ[illegible]はるはさきぬめり

少将左大下

人かるはゆめぬ山陰は[illegible]

[illegible]まみの[illegible]かりまとい[illegible]

かとこの人はしあまるとも[illegible]やあり

あるらんあるといつまつ[illegible]

伊勢

なにはかたのみしかきあしのふしのまも

こふのみしもかの人もいふめり

人の心この[illegible]まして[illegible]へとしもあらむ

[illegible]ふかるのかまおこし[illegible]人[illegible]まとは

てえ[illegible]まても[illegible]こととまるかしいふは

かりまつの[illegible]とるまてかくふかれかある

とひかつの[illegible]女の[illegible]

今こんといひしはかりに長月の

ありあけの月をまちいてつるかな

在原元方

なふるぬめ[illegible]橘のかをりて

まつのまつとかしまの[illegible]

つねよりもことにかくされ[illegible]

つゐなる　よろ人しまて
むかしをとこ　つのくにむはらの郡に
あしやのさとにしるよしして
いきてすみけり　たるはさするる人
のつれよなし人て正月もとこふゆて
いそる男のゆきりいときこゆけなる
さきし思ともたしわかるをとるま
てつひとそ
あしのやのいときこえもみゆる
ほいよわてしも[illegible]わかるま

むかしをとこ
人のたとへてかはしける人の
おほかるましを[illegible]わかれ
あはれといひつる橘のちかけの
あはのちる紀の[illegible]有ける
ともたちなりける女えとしくた
かこて行けるおとこに[illegible]侍る
くまはもろともにきよて
かくいひけれは別のやまとにまかりにき
つねとたのみけるにあつかひ[illegible]

てよふかき名をたちけれは
伊勢
ちかきところにすまひける人の許に
人のかしこまりてもまうでくると
あまたある名立てひとにいひける
ありける男たちのかうおやの衣ゝるを
といひつかはしけれは
こゝろの花まに
うれしことをも思ふるあひみしなかて
とるにはかきぬいたつらになりぬ

とふまでわかるゝことをかなしとそ思ふ
よみ人しらず
今こそあれ我も昔の男山さかゆく
我なくてかくし人へよりつゝ月を
影さへては
あきのこしるかひもなきかなしもの
とけりてわたくしの方にもの
物思ひける比
伊勢
あひしりける人の物まかりける
庭よる月をとへのうつりにけ

下のふ前りよまかりける人へはかまこまえ梅ゝ
まかりけるときもてくちかはわ女の許
まえなやしくしのゝめのわかれをしき
にうまれぬとなきをしかて
つらゆき
おもふことにきこえていはすちもせ
いりえいふく[illegible]ぬ梅のまき
女とよむちかるよいひかくつ袋
しも音信ともわかれ十月いつよ
あるへのかなしとひことあくとい

ぬあることもとしひとつにたれくれ竹
の葉よりつきてけつゝにける
よみ人しらす
うつろはぬ名になかれたる河竹の
いつれの世にか秋をしるへき
右 在五中将 又同
新古[illegible]
ぬれつゝもしひておりつる年のうちに
いつ梅風かはるもあらしと思へは
[illegible]
左 秋中
心なき身にはあはれもしられけり
伊勢

秋風にたなひくくものたえまよりしらす
なさいしませ
君のみきもせきに秋はいかにしまへ
おもへはいかなる乃このまゝ乃こゝろ
よみ人しらす
雲居にもしらぬ雲のうへ人も
かすみはたちとまるらんかなめる
まつ虫のこゑのなきとやいかにそ
ゆつるのこゑもかたらぬものか
伊勢

君もとめてみつからおほつかなく
人はうちなとあさましものゝはかなき
音羽山をとにきゝつゝあふさかの
そうしあすうせにはわかれ
せのうちにしてたちまちふかし
うらみあるおもひのつきもせぬ
粟田の山はまた人まつかなる
かねもりよみ人
足引の山した風もさそのひともなし
峯の雲しくたなひくめれは

大天下の事なりまてかれに連歌せく
すまへ云よりてうの御庵ともる中をも
えほりて　遊ひの方たる
無事しねくもて業も物へ思わ
袖にわもわりそとけるしかま庵
人の許まてつかはしける　伊勢
出そんなしの風のなかれは
このめもゆらむ様くしなし
ことも人にもなひのうゆとすくつる

かくなる人しましと
こまれともて人をわすれことさえ
ともみかはしくかつてとふわするゝ
ゆのふに滝の源もひとつの名に
出はよもゐわてもまかわりをも
とゝもなるあつたゝなくふえ
うたて花と思ふことかはりるの事は
君のよそにてなりやすらん
なし
かひもなく草の枕もとくつ葉の

ふかくおもひて草にまかせ[illegible]

題しらず

おもひ[illegible]

[illegible]

むかしを思出て[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

よみ人しらず

夕ぐれの[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

貫之

[illegible]

[illegible]

題しらず

[illegible]

なきなをいとひてあまたゝひこゝろ
うきめかけてなかるゝうらなれは
むかしあかしつまにはへりける人の内
またうつひかりもとにつかはせる
伊勢
山の[illegible]もとよりのこゝろしもしきぬ
みなともやふのうつるゝよりもある
人まつはまてとかまとも女のも
ふつゝしなれ
よみ人しらす
よゝはいつやんのその風のまを
おくるゝもいまは物やゝまつき
名し
伊勢
世間はいつともいはぬやの風とと
秋にしかみはふなれもちゝるもれ
題しらす
よみひとし
たとへなるゝ春ともひとゝきありかぬ
もゝ思ひのいつかんとやむおもれ
つゆのまもうきにこのもしれ
ほりつゝつる

たゝ水の心にまかせて袖にかゝる
かく尽ぬるや絶ぬと思へは
凡河内
もゆにたえぬとおもふくものいも
まつのきにやむとやすまく
なにみとよ子ふりそ
ふかきちゝ心つまのまよとかほとに
あらしふくにとこまりそ八歳わ
さくきつれ　ひとときこのみさ
たねもおもふ人の心のわすれかたきは海

うらみてもなく屋かたにきちて
山田法師
足曳の山ほとゝきすをるとも
我ことくたくひもなき物や
神無月のしくれ女のみつ
のわたらぬこそ心うかれ
はるかに人のつとめて
又人
とふらひてかへらしまさかなしも
よしてたのみし人をこそやはわするゝ

十月のよまもろもろにふしたる
ときはなる山のおくまてはこひ
あらひ侍りつみえけり

兼輔朝臣

思出てとふ人もしつまし紅葉の
ことはむかしのにはわかるまま
かなしかりけるたもと

坂上是則

さきたのこ根まてもみゆる雪もみな
わかみふりゆくかなしつるかな

しのひていひわたりけるつまのもとへまかりて
きける男はもとより京にあひ
しるまそ侍る女のもとに正月
朔日まてもまうてこて侍りけれは

よみ人しらす

まつ人はきぬときけともあらたまの
としのみこえける

あふさかの関

後撰和謌集巻第十九

離別 羇旅

みちの国へまかりける人にゆみ
ちからまとしてまかりけれはわかれける

貫之

あまくりよそもちてたくひなく猿あり
ありほとるゝのもとをしへとそ思

あひしりて侍りける人のあつまの
たへまかりけるを櫻の花のちるをりに
よみてつかはしける

よみ人しらす

ある人のむかひにまかるとて
みえとくのまえはちりもちよあらん
ともにまかりける人の餞し侍る
所にて

橘直幹

思やふんつのわたりとちしらぬ哉
らかすなるつみえん岸乃しも雲
志かつれなむものわかるゝ女に鏡をや
りて流かしらぬ
よみ也としられ

ゆきこゝにとしすきもてとまれのこゝ見
うこある親もなくてくらす
ことなる人もわかるゝ人は八橋へ
をとこもとより
駿河の
しるへ乃なるをあま海山の見えゆ
富士乃山をみるに懐かしきやうにもなれ
ともともとき國へまかりわするともなりけり
火うちもえてつゝしらぬ
よし人をこそ
この人ひもち高もをいかにわか橋かは

まとらのあゆきゝるとひしよ思ひそのまな
京よりくる女ことゝひける人と侍
る人心ことしをとこめされてくはしき
くのまかりわかれいし むかし男
うち橋て男とうらないけのちた
ありぬるわくをなとにたのむか
いまたにまかりける人とくいそへとかれ
ふのるとそのそれはいかにてとゝふとく
ある橋のこゝあまゆきかよふまでとも
名をといひまとてのひらる

をとなしき心ハふかくこのまもるを
おもひしはちと思ひそつかす
なし
君のてもを明しれて秋の花思ふよりし
昨日ひとつふたつのこゝろ一つに紀
おなし家によりける女の丹波國
に親代伝けるとゝひなかまわけける
に
前栽あるに
とゝもそ立田に秋くれはもみちとそ
かくのきまもらは紅もかうすれ明

とよとき國にまかりける人に諸乃を
つかはしけるかゝみの箱のうらにかけ
てつかはす
昔くはひとまへ　大内記則善
[illegible]鏡
[illegible]
このたひのいそきもうらん橋よもお
[illegible]
よみ人しらす
[illegible]
君もおもひきかいまやおもふらん

あひしりて侍ける女の人の國へまか
りけるにつかはしける
源善朝臣
いとせめて恋しき旅の唐衣ほとなくかへす人もあらなん
返し　女
唐衣たつ日をよそにきく人は
かへすはかりのほとも恋しを
三月斗にものへまかりける人に酒
たまひつかはすとて
よみ人しらす
ちるはなのそてにもとまるものならは
一のことくかへるをまたましを
善祐法師の伊豆の國になかされ侍けるに
伊勢
別れてはいつあひみんとおもふらんかきりある世の命ともなし
ながされ侍けるに　君
かなしともいはれぬ身をもたのみつゝ
とをくさかりし(た)れぬ身をかへるなり

ゑし

[illegible]

[illegible]

亭子院のみかどおりゐたまひける秋

弘徽殿のかべにかきつけゝる

伊勢

わかるれどあひもおしまぬもゝしきを

見ざらむことやなにかかなしき

清[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]国へまかりける人に扇[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]思

同し

みさとりまの山ことたかくも君をおもて
ちきりのあさまのけふりそたつら
おとこの伊勢の海のまわたりけふ
君かの枕くろよ有てよなさけのへ
まつハ袖よそなみたうかへる
名ひよまつわけり人よとゝまりて
なとそなそて流ハしる雨
袖めかくしハまともつゆるそ
枕くとなしゆきゝわたとゝめん

同し

別ちハいとゝ枕にうらみそ
なかれいなみまくるとまよふら
諸よもわかるゝ人によそへつゝ
うつりて見る日よきの風に浪
手向かもとしのくゆるゝなみな
安則の党あめの國へまかりける
よろしける　藤原滋幹か党かあめ
君かをのゝむとよしくの黒へゆく橋を
あひつらの山ゝかりてけききやすら

はへりけることゝきゝはいにしへの今めかしき
きくまうけ侍 小野よりけるに紀氏へ
なまめいておかしかるひとのかたちも
おかしきものゝいふにつけてもとめくく
出羽弁かわかちかきまけにはにこそありけるなれ
もとよりいふかひなしけるまゝにそとなりぬ
源のわかれ
はかなきをいはぬちなみの紙にきよ
たゝめのものへかはりにおしはかりけむ
平のたかともいやしきかたちとかへ人の

國のかみのむすめにてのちはとしへて
まへたかともとをのゝりたるに
みやこにとしふりよふなりにけれはの
うきとものたえもなくてともかくもおもひ
あひしりたりけるあるかきりの人のあはれもなきを
ものゝかたへやうわすれかてにかへさるへき
とこそ 文人をしも
かはらのくらいに思はへるはかなしくなりに
うたらをいひかけまいらせむとなりにし
なり

君かとも見えつゝと思ひしも冊ハ
ねさめによかのもちいふかすかくしと
秋たひよりまりわかるゝへなぬさもし紫
の松はつりてつゝける
松ねくて猿ひゝ人のくちかれきゝ
もみちもちよもそらはぬさもわかね
西院の斎宮の九月晦日なる御
かるともなるゝへなぬさつゝ見て
大輔
子の年来つゝかさぬさをとたなひかつらつ

秋ともまや松のへとすのゆん
ものへまゝるゝへなつゝける
伊勢
行かひて逢ふつゝらむすかみを
諸ともの かふ水のへちくもく松く
たいしもと
贈太政大臣
志んとといしてわかつるたなもも有様を
志つまあかきとかまして絶しもく
返し
いせ
きゝハまと別しときにいはせハ

乱もみえぬはおちそまさりける
よみ人しらず
春霞いつ明をはこなたとわかれても
うきをはわかれてなにはもしるらむ
伊勢
めかみてぬれ風のはとなくて
底にはたのまれしものを
かひへものわかるゝ人かつたゝる
君か代は流るゝ水のそこのみまさるらん
とこにぬみきよみわきてもひもなく

ぬるゝ袖しのゝめわかるゝ人つかり
つりは
まくらしよ心よのまよひこゝろま
あさをしとよ船のいかたとも
在原業平朝臣
みつゐふね安藤のふもとには
あきにつきてはかなみ小消をて
かなしきものはわかるゝ人
かゝるわ縁の袖をもちぬれ
うかるはかなみぬらんと思へは

春雨
めでたしな　はるさめや花の志ら露にありけり
何事も

九〇　伊勢が

もとへつくるかひは袖は水をそそくとも

船にはきよふりてよしと思へは

ともときとこゑふもつほととて女の

とふつらしけれは　男こそ

わすれしとこそはひとひてやかはきつ

あひみそめてはへ思ひさるれ

罷棹云

男は人をやしきなとにまかりて遠深

へもろもろとそとひもしのもとつかふそ

よみ侍ける　須人まさるれ

いつをはかりる潮をふやまとえん

よみおとひかる花かと女は

兔いしまともそえ

そのおいて云るよめかもたに鳴る

ふくのやしあめはいくよまれん

あつまもあわつるまるとめつるる心

くるはしける秋よ海をやるまきるよ

河のほとりを見てよめる　業平朝臣

いとゝしくすきゆく方のこひしきに
うらやましくもかへるなみかな

白山へまうてけるみちにてよめる
たかはの人はつかはしける

よみ人しらす

都まてはとほくきこえし
ねのまくらしとこそおもへ
あつまちのみちのくのくにゝ

なつまゝはかはるに女のもとよりやと
ひとしれすわかこゝろのおもひ
二三日はかりやむことありてとはさりけれは
ものわすれしけるかとつかはしける
きつゝへしのきそをはわする

中原宗興

山里は花のちりなむ
見えつゝもしめひとつもよ
ときはのわのみかき船のゆくへ
こゝろさしの山のはの月の影

らんよわいつるやよりのへ人の秋いかなり
安倍仲丸のもろこしにわたりてよみける
ましといひけることを思ひやりて
つれなき
都にて山のはに見し月なれと
うみよりいてゝうみにこそいれ
法皇宣旨の歌とて下りにありける
侍ともすく　秀能右下
水のしらくも人てもとなるうみ
たいのころもまたらやかまん

たまのわくるはいつるひかしの山
ともまつるまち人のまそ
見し人の山のはをくらしことに夜とて
この思ひこそふかくてありける
わかまつとまち山のはとに下なりまて
よみ侍りける
藤原ひとゑわかるらうめ入り
伊勢
しらそゑるるねあやなくとも
うちのとよとろすて
水もとふるきめるとき八重の

うちのとれどもやくてめまかなら葉
海のちかわすれこまか井せきえし
侍るつれは 小町
花とちえし風ふる女猶ハやくえ海の
かえしはとちまるおきへしし波
男のまちある人のもとへわたるる道
まとえ人の是のしけ関まて女乃京
まゝわけ花のまへんよ女のて
真静法師
是のいのちもの又ともてし人々

さてるしゝめもしとうしねかゝる
得皇とせまか山ゝれ年を
京ま佐ハまる左とき候ゝ徐
ともまとふ中道俗ミゝよのまで年
かるま 僧正遍昭
人こゝかくうへとのきへる
こやこちすくれまかなうれ
おたわ佐そこのち侍るま母
乃ちゝま月とのて
つねき

こゝは月代ふるまで見へ秋ハ天の
いろ見えていつよりも有明の
たゝしきと　京よりの御祭
草花も見えちりかゝるまへ入まゐらせ
ところところ揚まゐらせ候まゝや
京はおもふ人住居をさきに御知らせ
てきうるさかんとおもわせ九月に
のまにに　よき人しきと
おもふ人有そのあまいくつの衣
つまをつゝみひのうち恵へのをまき

くもまくるゝ松子つゝわいふるまなき物
こゝろもよもかけもとりのまいらせ候
文のなきといふる所よりはなおしる
ましくさまかるまゝお目やことゝあるは
京性法師
猶山のまよふにほひもま京なきの
よちのしいあへり
かしこのやうにん

後撰和歌集巻第二十

慶賀　哀傷

女八のみこ、このみこのためよ四十賀し侍りけるに菊の花もちて
しはすまて　藤原伊衡朝臣　敏行男

よろつ代の霜にもかれぬ白菊をうしろやすくもかさしつるかな

典侍あきらけいこのみこの宴ねのためよ賀し侍りけるに玄孫のもとにまかりて
めのとはなれうしたてまつりし

典侍あきらけいこ　御匣殿別当

ちよつくるあまた流つらなりおきまへ八
君かちよをもせりあはとうちかへしや八
しらまつまて

太政大臣　貞信公

ときはなるわかなゑらへて老の世に
うれしきことを流れてそ思

のちまてあまたのみこかはかりける源
日あまりひし侍りけるに右大臣を
かはらけとりてよませ侍りける

貫之

ことはりなし竹のおとせのうちにはよるは
人の思ひかくあはれ
蜷はやまめるとし侍るみぎ
よみ人しらず
ほとゝきすいつはふるとなくはたれか
おもひつゝたのめし人の有ける
左大臣の家のもとは女にかわ
し書きけるは
つらゆき
あたらしきやとてもちのうちに松かる

ちやこたのさきもちゐはけふのん
人の命ふかゝるかと苦しみ草を
かきしてて
よみ人しらず
折しもる深みの草にそ咲きみる
ちよ松のちとせやまそそみれ
女のもとにつかはしける
君のみや松のもとをせしつつみて
見よわすれん神のやしろ
年星をとふとて女橿越のみ
わかれをわすれいくつ

流ゆくる　権律師

もゝとせまてやちよとせぬ行末は
山のいはねも君か代をこそまつや
天の下の民はよろこひ心を送る
とくみへる

備前仁教

こゑもろくもにおとへてきゝ人萬世ふ
花のもとわたるかはしつのふ

今上（井上天皇）御時太政大臣
のためにいのりまいて沼ほを捨
送つまもりのよ御くみなるまつりを

太政大臣　貞信公

君かよはいはふこゝろのかゝ掛る
風は野辺の心の花をそふる
御花の

今上御製　天暦

もろともにことたかへぬいはひ山の
ことともにともとみ時をまつ
今上おもはかりおもふに時なきを
うらせきもうつれ傾かぬ
山人のこゝろたまきいるみのなる死
おしのとしもとつもんとそ思

可有沙汰者也

備前守

[illegible]

湯花　湯盤銘

とし月はつもれとあかぬゆかはかな
いとゝこゝろけさにすましつらん
東宮乃湯あみよく竹の世の行
ひさしかれ　ときはと

君かよのふかきうちにてかみる英行よ
ちよもむかしかはらぬもかけ
院乃殿上まて文の湯舟のわかれ湯盤
ひさしさなみひさしことしも乃みよ

金盥いとさきよきさ　清子

もとのこゝろ氷くもらんもなほもよの
つねつきぬすゝしくとも人よ
石深乃みこ[illegible]よく女郎
見この流よ　　春天下
あやしの松のみとわかのみ
あまつのあらのもと[illegible]
十二月いつれにつけもるはそ
貴人
いふことときとなきにみえ
としのこゝろしりも君もしきなり

無常二首

あはれしのゝめまつりけるとをしまゝ
てあつまれわかれをしくるゝそゆふわ
かなしは　左大臣
まことにめ人も有りまほしきあつまゝよ
あはれもはかなきことをへつゝわれわ
あはれのはかなきよし一条よまゐりて
太政大臣　貞信公
まことはかなき夢のうちにも思ほゆや
君かなしきこそかなしきへとも

花
宿ちかくはなのもとにこゝもとゝゝ遊つゝくゝ
桜あかうへとゝとものまことしとゝわれるゝ
先帝おはしまさで又の年思ひ侍りて
てつかはしける
いのちかくてふかるゝわかれしかな陰　三条右大臣
家乃花のまとゝをゝろ物哉
花
山ふかみ乃宮はくさきと君かゝく　兼輔卿
色はしつくゆめるとゝわかあわ

時もちの朝臣まかりて後いそぎて此
ちかく成て人の許よりいのまかでける
んと思ひかへせたまへる

本朝云
時望朝臣妻

別れてはほどをへだつとも思ほえず
こひしきことのきはまりぬれば

女五のみこのいへにて
て内侍のかみのうたり

右大臣

たのもしきはなのさくら花ちるよもしらぬ
やかたもちると

ふとのかたこのはるふかきん

左　内侍のすけ

むかしをおもひしなかなかになかでみるかな
いとしのよのちふをつゝみかねつる

女四のみこのいへにつゝきわて

伊勢　天慶元年十月事也

きえたなきものかむしろのきはゝ
人のふるしつきやしのへん
のなかに　みえ　もて
き候人もあり　みなるうのきは

いとゝしくすくる月日をしまるゝ
先帝かくれ給ひて又のとし九月を
くるゝはなかる　　三条右大臣
はつよりもやくるゝおなしき
まちのしめはむかしのしらまは
　　　　　　兼輔朝臣
ちくなすはぬれしとし衣をは
あくなるはぬるゝ
あるうしきよしかへるとわかるま
かとのをつゝかな
　　　　　　三条右大臣

人のよのはかなきのちのかなしさは
わかみは君よりもくれゆやは
めのまものわて侍とてよはひの
かへよかの侍りける時のきつかて
けるてくとのへはわて
　　　　　のちに兼輔
ぬれぬ夢のよのつのへをうつろはれ
うつゝ橘のゝかのうつゝ
あひしりて侍りける女のかもとはわかれ
をとこ侍ける女のよ夜更てはとのもとに

[illegible]

夕[illegible]のもとの[illegible] 周防[illegible]

[illegible]

七月[illegible]の母[illegible]

[illegible]思ひ[illegible] 萩

の花を折て[illegible]

女郎花[illegible] 太政大臣

[illegible]

[illegible]人の[illegible]

[illegible]の鏡[illegible]人[illegible]

[illegible]

[illegible]人の[illegible] 伊勢

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

京極御息所 時平公女 法皇女御 雅明行明母

墨そめのこきもうすきも見る時は
かさねて物そかなしかりける

女四のみこのうせ侍りける時

右大臣

昨日まてちよと契りし君をわか
しての山ちにたつぬへきかな

先坊をこひ奉りての春 大輔

つれしかる いまきの歌の女

あら玉の年をまたてもくれつもる(?)

いつしかとはれのをまちあらてき(?)

右 大輔

猶まてそゝもめぬいつの常るの
むかしのあはとはおもひ尾ゝまて
おもしくの栞のあきは

言と歌下女

もみちともみ小あきみす秋のよのわ
かれしものをおもひもひかや

清慎公の枇杷大臣のいみにこもりて侍
りけるよつかはしける

藤原忠文

ありし世のあまきことものとも人の
しらしりにたちかへる成ける
なく　きよたこと
あはれより梅ての人の世を
めくりみし袖もと思ひ出ふ世を
菩提樹下なるたそ浄土仏の国
よわきわのあらましかのはかなさの数よ
て
うつりし二葉根は世まつはあまねく
つ梅さ

君のみとこ世のちらぬなみのすみ
なりのつきよのこなる人
君かまもえ気はかめりとかえよ
つきせぬもしのいゆきるなわれわ
人のとふひよりて多きるに
いやをなきわよいとひ作々まは
かえその程ふりしきつけ行れる

戒仙法師

るまつる人もと梅つしとやつらみ
袖いもかくもちの色のいよかぬ梅

ふくるまて待ける人のいとよこまし
て侍りけるに西の山の日入かたに
侍りけれは　よみ人しらす
袖のうへに晴るゝ時なきわかなみたは
かゝるをも雨ともおもはしとわかなる
人のいのちもとの思はしよのへ
つまおもひ
左里てい　君はいつともまちつとて
いつまてのいのちとしらはいかまし
敦忠朝臣のもとにまかりて文の常の侍
朝臣のもとにまかりてみれはことしの
さまのわたり物うまし侍るつい
てによみ侍りける
清正
君のいはふるやまのしつ雲の
ねのひしあきらの人もゝしまし
おもやのつゝしまゝかせをきわ
かきを行きてもゝはまゝにまし
しゐをと人のいはまては
よみ人しらす

わひ人のたもとにやとる月かけ八
かつのはらとるとはかへりまし
在し
よそにする袖たにひちて苔衣
あらはにもしるくもえぬなき
まつしまを　伊勢
ほともなくたえしかたみのなかなかに
とまり八いのちもしらぬしたひそる
人をとむるかなしきわかれの思八
ねてのなる夜も夢にみえぬさ

おもふ人ありとはなしにいつしかわ
かれ八　玄上朝臣女
暁のまくらもふくとゝめつゝぬれ八
枕のまくらにみえぬなみたのつゆけさ
在し
かなしきのふくとゝもにおもひわか　大輔
夢のうちもあらはにも夢とこそ枕八
春乃としつもるみちのはかなさ
やすそ
みけるたにをかしのひともおもひしや　伊勢

こんとし春の暮とかへしとハ
心ものひ侍るつるのはしつゝ
かたはらに小紙なとまゐらせて鳴
侍りしハ面白からす侍るまゝ
あるは禅よりのちに大かたハのなと
たゝ心の上よりあらはれん
めの前の有のわての年のはしめ
つゝしみて此日かくことはり
なけかれて

道揖翁阿

ちかき人のしるしつる年ふる
くれしてのかたちのまことし
花し 侍れ書
逸かかるにもの小筆のくれならは人かく
かの事や いとし
しもとくなれ なる世て

此集故者公卿皆書名朝臣字批把大臣丞の二首 伊勢 躬恒 書業平朝臣名此付事後代之人或推而書之是非書写之誤此集之本説也不可書改

貞応元年七月十三日為備後学之證本凌老眼終書写之功

戸部尚書藤 在判